センター模擬試験

第３回　国語

解説と解答

【国　語】

【解答・採点基準】

（200点満点）

問題番号	設問	解答番号	正解	配点	自己採点
第1問					
問6		10	③	8	
問5		9	⑤	8	
問4		8	③	8	
問3		7	⑤	8	
問2		6	④	8	
問1	(オ)	5	①	2	
	(エ)	4	⑤	2	
	(ウ)	3	④	2	
	(イ)	2	⑤	2	
	(ア)	1	②	2	
第1問 自己採点小計				(50)	
第2問					
問6		19	④※	5	
		18	①※	5	
問5		17	③	8	
問4		16	②	8	
問3		15	⑤	8	
問2		14	④	7	
問1	(ウ)	13	①	3	
	(イ)	12	③	3	
	(ア)	11	②	3	
第2問 自己採点小計				(50)	
第3問					
問6		27	②	8	
問5		26	③	7	
問4		25	④	7	
問3		24	②	7	
問2		23	⑤	6	
問1	(ウ)	22	①	5	
	(イ)	21	④	5	
	(ア)	20	③	5	
第3問 自己採点小計				(50)	

問題番号	設問	解答番号	正解	配点	自己採点
第4問					
問6		35	⑤	8	
問5		34	③	7	
問4		33	③	7	
問3	(ii)	32	①	6	
	(i)	31	②	6	
問2		30	①	8	
問1	(2)	29	④	4	
	(1)	28	③	4	
第4問 自己採点小計				(50)	
自己採点合計				(200)	

※の正解は順序を問わない。

【解説】

第1問　現代文

【出典】

本文は、『ことばの力』（二〇一二年　京都大学学術出版会）所収の山極寿一「サルの名付けと個体識別」の一節。作問の都合上、一部省略した箇所がある。

筆者の山極寿一（やまぎわ・じゅいち）は、一九五二年東京生まれ。京都大学理学部卒業。三十年以上にわたりルワンダ・コンゴ民主共和国・ガボンなどアフリカ各地でゴリラの野外研究に従事。ゴリラとチンパンジーが熱帯林の同じ場所でどのように共存しているか、他の生物とともにいかに進化してきたかなどを調査しながら、類人猿の行動や生態をもとに初期人類の生活を復元し、人類に特有な社会的特徴の由来を研究している。著書に、『ゴリラ』『暴力はどこからきたか』『家族進化論』『ゴリラは語る』など多数。

【本文解説】

本文は、言語を持つことで自他の意識や複雑な社会関係を可能にした人間と、言語を持たないために自他意識や社会性を形成できない存在としての動物とを峻別する従来の考え方に対し、今西錦司をはじめとする日本の研究者が、サルやゴリラに名前を付けて観察することによって、動物に人間に通じるような意識や社会性を見いだしたことを述べたものである。本文は十の形式段落からなるが、これを内容にそって三つの意味段落に分け、順に解説していこう。

Ⅰ　人間と動物を峻別する考え方（第一段落）

動物は、長い間、個々人がそれぞれ独自の存在としてとらえられる人間とは異なり、「類として一般化」されてきた。具体的に言えば、人間にはそれぞれ固有の名前が付けられるが、ゴリラはそれぞれの名前を持たず、どの個体も「ゴリラ」という類の呼称で表すのが適切だと考えられてきた。このような区別が生じた主な原因は、動物は人間のような言葉を持っていないということにあった。高度な言葉を操ることのできる人間は、それによって自他に関する意識を可能にし、他者との社会関係を意識的に構築することができるようになる。それに対して動物は、言葉を持たぬがゆえに、自他意識を持たず、社会的現象を人間のように知覚することはないとされた。したがって、人間と密接な関係を結ぶ家畜やペットを例外として、動物たちの行動を、個性や自己意識を持つ人間のように、個体名とともに描写することはできないと考えられた。

○人間と動物を峻別する従来の考え方
・動物は人間と異なり言語を持たない
←
・動物には自他意識や社会性が欠けている
←
・動物は個々の個体ではなく、類として一般化されてとらえられた

Ⅱ　シートンの試みとその評価（第二段落～第四段落）

Ⅰで見たような動物観に新しい見方を吹き込んだのが、「シートン動物記」で知られるアーネスト・トムソン・シートンであった。自分の観察や、猟師や牧場主から聞いた話をもとに書かれたシートンの「動物記」は、動物を主人公に据えるばかりでなく、彼らに名前を付けてその活躍を描写している点で、それまでの物語と一線を画している。動物たちの会話にも人間の言葉が使われているが、一方で彼らの行動はできるだけ正確に、自然のままの姿で描かれた。各地から集められた標本をもとにした分類学が中心だった十九世紀の動物学の中で、「文学でありながら、優れた自然誌」でもあった「動物記」は異彩を放っている。（第二段落）

しかし、欧米社会において、シートンは、子どものための「お話」を書いた文学者ではあっても、科学者としては受け入れられてこなかった。それは、動物に個体名を付け、人間の言葉で会話させ、彼らに感情を与えたシートンの手法が、当時の人々にとってあまりに擬人的だととらえられたからだろう。Ⅰで見たように、動物と人間を、言葉と意識の有無を指標に峻別する欧米社会の常識にとって、これらはファンタジーの世界においてしか認められないものだった。（第三段落）

ただし、シートンの用いた野生動物に名前を付けるという方法は、「動物文学」という新しい分野を生みだし、ひいては動物たちの生活や行動や感情をドラマティックに描きだす映画・アニメ・マンガなどが興隆するきっかけともなった。他方で、学問の世界では生態学や動物行動学などが登場して、動物たちの野外生活が解明されていったが、彼らの行動はあいかわらず本能的で機械的なものとして記述され、それを人間になぞらえる、すなわち擬人的な見方をすることは禁じられた。自然科学は人間以外の生物と無生物を扱い、人文科学は人間を扱うという学問の境界が、動物を人間的に扱うことを強く妨げたのである。（第四段落）

○シートンの試み

・動物たちの行動をできるだけ自然のままに描く

⇔

・動物を主人公にし、名前を付けて描写する

・動物は人間の言葉を話し、知恵や感情を持つ

→

○欧米社会の受けとめ

・シートンの「動物記」はあまりにも擬人的である

・シートンは文学者であって科学者ではない

Ⅲ　日本の研究者たちの挑戦（第五段落～最終段落）

第四段落で見たような「動物機械論」を否定し、人間に通じるような社会的知性を動物に求める学問が、第二次世界大戦直後の日本にあらわれた。Ⅰで見たような考え方、すなわち生物のうちで唯一人間のみが言語を持ち、それゆえ自他意識や高度なコミュニケーション手段や文化・社会を専有するという考え方を、今西錦司らは批判しようとしたのである。つまり、動物たちはお互いを「類」ではなく「個体」として識別し、したがって自他意識を持っており、動物たちも社会的な現象を知覚し認識することができる、ということを明らかにしようとしたのである。（第五段落・第六段落）

そのために今西は、Ⅱで見たシートンの方法を採用した。すなわち、一頭一頭に個体名を付け、その行動と社会関係を観察しようとしたのである。（第七段落）

動物の個体を識別してその行動を調査することは、欧米でも早くから行われていた。しかしそれらはサーカスや動物園という限られた場であったり、野外生活の観察であっても、人間のような個体名ではなく数字による識別であったりと、動物たちの自律した個性を真に認めるものではなかった。今西たちが始めた動物社会学は、「個体識別という方法によって、個体を追求し、個体の行動を通して個体相互間の、すなわち社会関係をとらえよう」という明確な狙いを当初から持っていた。動物に固有名を与えて観察することで、個性・単独性への志向が言語によってのみ可能となるのではなく、言語以前の動物社会にも存在するという考えがその根底にあった。（第八段落）

その成果を今西は、学問的論文の形ではなく、「動物記」として発表した。しかしシートンとは異なって、彼らは動物文学を書こうとしたのではない。今西によれば、「シートンはおおむね英雄をえがいて、動物の社会をえがきだしていない。……われわれは、文学よりも科学を求めるものであった」。（第九段落）

名前を与えられた個体間の社会交渉を観察することによって、サルや類人猿が、人間に通じる社会性を持つことが明らかになってきた。逆に人間の社会も、言語のみによって可能になったわけではなく、言語以前にすでに存在した社会性を基礎に持つと考えられる。今西らの粘り強いフィールドワーク（＝実地調査）にもとづく研究によって、言語を持たない動物の世界にも自他意識や社会性が存在するという考えが、広く認められるようになっていった。このように言葉をしゃべらない動物の心や社会関係を言葉を通して考察することができるのは、言語に比喩の力（＝あるものを他のものになぞらえて示す力）があるからだ。言葉をしゃべらない動物を個性を持ったものとして観察し、人間に通じるような彼らの意識や社会性を類推していくこと、これこそ言葉によって人間が開いた新たな世界の解釈だったのである。（最終段落）

○今西らの動物社会学

・言語以前の動物の社会においても単独性への志向が存在するという考え

←

個体識別と名付けによる観察

＋

言葉の持つ比喩の力

←

・動物にも自他意識や社会性が存在する

・人間の社会や文化も言語以前の社会性に育まれている

【設問解説】

問1　漢字の書き取り問題

同音異義語の落とし穴にはまって誤りの選択肢を選ばないように、〈読み〉だけではなく、前後の文脈からその語の〈意味〉を確認したうえで、該当する漢字を正確に書くようにしよう。

(ア)は、〈はなはだ勇壮なこと〉という意味で「壮絶」と書く。②の「壮行（＝旅立ちに際して、その前途を祝し激励すること）」が正解。残りの選択肢は、①は「走者」、③は「一掃」、④は「操作」、⑤は「総合」。

(イ)は、「優れた」と書く。⑤の「優勝」が正解。残りの選択肢は、①は「勇敢」、②は「友人」、③は「憂鬱」、④は「郵便」。

(ウ)は、〈困り果てている状態〉という意味で「窮状」と書く。④の「貧窮」が正解。残りの選択肢は、①は「旧態（＝昔からの状態やありさま）」、②は「休養」、③は「急変」、⑤は「給料」。

(エ)は、〈他のもので替えること〉という意味で「代替」と書く。⑤の「交替」が正解。残りの選択肢は、①は「体操」、②は「隊列」、③は「大河」、④は「忍耐」。

(オ)は、〈争いの間に入り、双方を和解させること〉という意味で「仲裁」と書く。①の「裁判」が正解。残りの選択肢は、②は「際限」、③は「色彩」、④は「開催」、⑤は「粉砕」。

問2　傍線部の内容を説明する問題

傍線部の中に「そういった」という指示表現があるので、直前の第一段落から、「人々の動物観」を確認していこう。その内容をまとめると、言語を持つことによって自他意識や社会性を獲得した人間に対して、動物は言語を持っていない（a）ので、人間のような自他意識や社会性を持つことはできない（b）。したがって動物たちの行動を、人間のように個性を持つものとして個体名とともに記述することはできず、類として一括して描くしかない（c）ということになる。これらa～cのポイントを的確に指摘した④が正解。

①は、一見a・bの要素が入っているかのように見える。しかし、第一段落では「人間はこの世で唯一意識をもつ存在であり、その意識は言葉によって可能となる。言葉をもたない動物は自他を意識することも、社会的な現象を知覚することもできない」と述べられている。これは、〈言語〉があってはじめて〈自他意識や社会性〉を可能にするということだ。①はこうした関係を「他者との社会的関係を構築することはできないので、その意識世界を言語によって丹念に描き分けることはできない」という誤った形で記しているので、誤答。

②は、①と同様に、本文では〈言語〉が〈自他意識や社会性〉を形成する基盤とされているのに、それを「自他の差異を意識してもそれを言語で表現できず」と説明しているので誤り。後半の、動物自身が「自己を個体性を持ったものとして他者に提示することができない」という部分も、人間にとって動物は個体性を持ったものとは見なせないという文脈とずれる。

③は、「家畜やペットといったもの」は「言語に支えられる自己意識を持つ」かのように述べられている点がおかしい。たしかに「家畜やペット」には個体名が与えられるが、それはたんに人間との密接な関係を示すものであって、彼らが人間同様に「言語に支えられる自己意識を持つ」からではない。

⑤は、「昔話や寓話といった虚構においてのみ人間と密接な関係を結びうるととらえられてきた」という部分が誤り。「昔話や寓話」に関して言われているのは、その中で「動物たちは類として人間とさまざまなドラマを演じてきた」ということだけである。さらに、本文中には「人間との密接な関係」を結ぶものとして家畜やペットが挙げられていることからも誤答と言える。

問3　傍線部の理由を説明する問題

シートンが欧米社会に科学者として受け入れられなかった理由が問われている。したがって、〈シートンの仕事の内容〉（a）を確認したうえで、それが〈欧米社会の科学者の要件〉とどのような点で相容れなかったか（b）を考えればよい。

aに関しては、第二段落にくわしい説明がある。シートンは、「自分の観察だけでなく、猟師や牧場主から聞き込んだ話をもとにして物語を書いた」が、その物語は「人間ではなく動物が主人公になったことと、動物たちに名前を付けてその活躍を描写した」ことに大きな特徴があった。さらに「動物たちの会話には人間の言葉が使われている（＝「文学」）」一方で、「彼らの行動はできるだけ自然のままの姿を模して描かれている（＝「優れた自然誌」）」と説明されている。

bに関しては、第三段落に説明がある。欧米の著名な動物学者たちは、シートンは「文学者」であって「科学者」ではないととらえている。彼らにとって、動物と人間との違いは「言葉と意識の有無」にあり、それゆえ「野生動物に個体名を付け、人間の言葉で会話をさせ、動物たちの感情を描写して見せた」シートンの「動物記」は、科学と呼ぶには「あまりにも擬人的」であり、「ファンタジー」でしかなかったのである。したがって、以上の内容を的確にまとめている⑤が正解。

①は、aに関しては正しいが、後半の「動物と人間の類似性を踏まえない現実離れしたものととらえられた」がおかしい。欧米社会において動物と人間は「言葉と意識の有無」によって峻別されていたのは**【本文解説】**Ⅰで見たとおりである。

②は、後半の「昔話や寓話の伝統を受け継いだものにすぎない」という部分が誤り。「昔話や寓話」は、動物たちを「類」として扱う（第一段落）ものであり、個々の動物に名前を付けるシートンの手法とは根本的に異なっている。

③は、前半の「後世において動物行動学や生態学の端緒を開くことになった」という説明が間違っている。なるほど第四段落には、シートンの試みが後

世に与えた影響について触れられているが、それは「動物文学」というジャンルを生みだしたという内容であって、「動物行動学や生態学」とは無関係である。

④は、bについては正しい。だが、aに関わる「人間の言葉を話す動物の内面世界を掘り下げることで、動物の自然な姿をかつてなく正確に表現しようとした」という説明がおかしい。たしかにシートンは動物に人間の言葉をしゃべらせ、その内面の感情を描写する一方で、当時の水準に照らせば野生動物たちの生活を正確に描写したと述べられている。しかしこの両者は、選択肢のように前者が後者の原因になるというものではなく、本文ではシートンの作品の二面的な特徴として並列的に説明されていることに注意しよう。

問4　傍線部に関わる内容を説明する問題

「今西」の試みについては、第五段落～最終段落で説明されている。**【本文解説】Ⅲ**の部分で詳しく見たので、もう一度参照してほしい。その要旨を簡潔にまとめると、今西は、自らの独自性への志向が言語以前の動物社会にもあるという想定（a）に立ち、動物たちの「個体の行動を通して個体相互間の、すなわち社会関係をとらえよう」と狙いを定めて（b）、個々の動物に名前を付けるというシートンの方法を継承したのである（c）。したがって、これらのポイントを的確に踏まえている③が正解。

①は、b・cの説明は正しいが、後半の「人間をも超える洞察力を有していることを証明しようとした」がおかしい。たしかに最終段落には、類人猿たちが「ときには人間を超える洞察力を発揮する」と述べられているが、これを証明することが今西の目的であったとはどこにも述べられていない。

②は、b・cについては正しいが、後半の「動物が人間とは異なる言語を用いて独自の社会を構築している」が明らかな誤り。今西は「人間とは異なる言語」の使い手として動物を見ていたわけではない。

④は、bの説明は認められるが、後半の「自己のために他の個体を利用する社会的理性がある」という内容が、本文に根拠のない説明となっている。

⑤は、cは正しいが、後半の「従来の論文の枠組みには収まらない文学的なジャンルを開拓しようとした」が、第九段落の「われわれは、文学よりも科学を求めるものであった」という今西の言葉の引用と明らかに矛盾する。

問5　傍線部に関わる内容を説明する問題

傍線部冒頭の「それ」という指示語の内容を明らかにしたうえで、「言葉によって人間が開いた新たな世界の解釈」という傍線部後半の内容を、文脈から丁寧に掘り起こそう。「それ」が指しているのは、「それぞれが固有の出来事である生物の現象は、言葉によって再現可能な現象として描写され、伝達される」という直前の文である。この表現はややわかりにくいので、その前にある「言葉をしゃべらない動物の心や社会関係の認知を、私たちは言葉によって表現し、言葉によって理解しなければならない。それが可能なのは、言葉が比喩の力を持つからだ」という一文を踏まえて考えよう。すると、〈言葉の持つ比喩の力（＝あるものを別のものになぞらえて示す力）〉によって（a）、〈言葉をしゃべらない動物の意識や社会性〉をとらえる（b）ことができるという内容が抽出できる。これが「新たな世界の解釈」と言える理由は、最終段落に「社会という概念も拡張されて、人間以外の動物にも当てはめることができるようになった」、「人間の社会や文化も言葉のみによってできたわけではなく、言葉以前に獲得した社会性によって育てられてきた」とあるように、従来の認識の大きな転換（c）を導いたからである。これらのポイントを簡潔にまとめた⑤が正解。

①は、「動物たち」の「洞察力」を「言語を用いて分析する」という内容が、a・bからずれている。また、後半の「動物たちが人間と同様に固有名を媒介にして社会を形成している事実を発見した」という部分もおかしい。最終段落には、類人猿たちの行動に触れ、「仲間との間に起こった出来事を、われわれ人間と同じように固有名による物語として記憶し応用している証かもしれない」と述べられているが、それはあくまで〈可能性〉として述べられているのであって、「事実」として「発見」されたわけではない。

②は、後半の「どのような次元のものであれ、意識や社会を形成するには物事を類推するという言語固有の力が不可欠だ」という部分が間違い。言語を持たない動物にも意識や社会性があるというのが筆者の主張なのだから、言語がなければ意識や社会が形成できないと説明してはならない。

③は、前半の内容はb・cに触れているが、後半の「意識や社会の本質を解明するためには言語を介さない方法も必要である」という部分が、最終段落の「言葉をしゃべらない動物の心や社会関係の認知を、私たちは言葉によって表現し、言葉によって理解しなければならない」という説明と明らかに矛盾

する。

④は、後半の「言語以前の経験に支えられているかに見える人間の意識や社会も、結局は言語に規定されているという痛切な認識に至った」という部分が、「人間の社会や文化も言葉のみによってできたわけではなく、言葉以前に獲得した社会性によって育てられてきた」というcの内容とずれている。

問6　文章の論の展開を説明する問題

【本文解説】をいま一度参照してほしい。本文は、まず、言葉を持たず自他を意識しない動物が、人間と峻別され類として描写されてきたことを指摘したうえで、その考え方とは異なり、動物を個として表現する方法を採用したシートンの試みとその評価について触れ、最後に彼の方法を批判的に継承した今西ら日本の学者たちの研究について、その内容と意義を述べたものである。この流れを的確に押さえた③が正解。

①は、前半の「動物の生態については知る由もなかった時代」という説明がおかしい。たしかに第二段落に、動物たちの生活がシートンによって正確に描写された時代には、「動物行動学も生態学もまだ世に出ていな」かったと述べられているが、第一段落を踏まえれば、その時代にも動物たちの行動は「類」として一括された形ではあるにせよ、ある程度知られていたはずである。

②は、動物を「個」として表現したというシートンの意義に触れていないうえ、後半の「今西がシートンが成し得なかった動物の社会学的研究の夢を実現させた」という説明もおかしい。これではシートン自身も「動物の社会学的研究」を夢見ていたということになってしまうが、シートンがそのような夢を抱いていたということはどこにも述べられていない。

④は、後半の「シートンは動物の生にも言語が介在していることを明らかにし、今西がその言語生活の実相をより正確に見極めた」という部分がおかしい。たしかにシートンは動物に人間の言葉をしゃべらせたが、そのことによって「動物の生にも言語が介在している」という事実を明らかにしたわけではない。今西の試みも、言語を持たぬ動物の意識や社会性を言語を用いて類推的に把握するということであって、動物の「言語生活の実相」を究明するといったものではない。

⑤は、「古くから動物の個性に着目してきた日本の伝統」という部分が、本文になんら根拠を持たない内容となっている点で誤り。

第2問　現代文

【出典】

木山捷平「尋三の春」の一節。ただし、問題作成の都合上、途中一部を省略した。小説「尋三の春」は昭和一〇年に発表された作品であるが、今回は『氏神さま・春雨・耳学問』（一九九四年、講談社文芸文庫）に収められたものをもとに作成した。

木山捷平（きやま・しょうへい）は、一九〇四（明治三七）年、岡山県笠岡市（当時の地名では小田郡新山村）生まれ。姫路師範学校を卒業後、尋常高等小学校の教諭となるが、文学を志して上京、一九二五年に東洋大学に入学（後に中退）。当初は主に詩作を行っていたが、一九三三年に太宰治らとともに同人誌『海豹』を創刊して以降は小説を多く発表するようになる。日常の些細な出来事をこまやかにとらえる作風を特徴とし、この時期の代表作には、今回の問題文「尋三の春」のほか、「子におくる手紙」などがある。

一九四四年に満州（現在の中国東北部）に農地開発公社の嘱託として赴任し、現地召集を受け兵役に就くが、終戦一年余を経て帰国。その後は自らの体験をもとに彼独特のユーモラスな視点から戦時下の人々をとらえた作品を発表し、注目される。特に、満州における戦争体験をもとにした『大陸の細道』では芸術選奨文部大臣賞を受賞している。一九六八年、死去。

【本文解説】

本文は、学校生活のいくつかのエピソードを通して、新任の大倉先生や級友たち、家族との関係のなかで様々な思いを抱く、尋常三年生の「私」の姿を描いたものである。

文章そのものは決して読みにくいものではないが、小説の舞台となっている時代の風物や考え方が現代とは異なっており、また古い言葉遣いも多く、わかりにくさを感じた人もいたかもしれない。本文を注意深く読んで、先入観に惑わされない正確な読解を心がけよう。今回のような時代背景を異にした文章に対処するためにも、普段から自分の知らない事物や言葉については辞書などで調べ、幅広い知識を身につけておくことが大切だ。

本文は、その内容から五つの場面に分けることができる。以下で、各場面の内容を確認していこう。

Ⅰ　新任の大倉先生がやって来る（冒頭～10行目「……校長が言い添えたのである。」）

この文章の主人公「私」は「尋常三年生」、すなわち小学校三年生になったばかりである。「尋常」とは尋常小学校の略で、明治半ば以降第二次世界大戦中の一九四一（昭和十六）年に「国民学校」と名前が変え

られるまでの間、日本の小学校はこのように呼ばれていた。

新学期初めの日に学校へ向かう「私の心はぴちぴち跳ねていた」。それは、新学期を迎えられた喜びだけでなく、学校に新しい先生が来るという噂があったからでもある。果たしてその噂は本当だった。新しく来た「大倉先生」は新任の挨拶として、名前の「大倉」（＝「大きな倉」を満たすだけの財産があるという意味）に似合わず生まれた家が貧乏だったこと、独身で師範学校（＝教師になるための勉強をする学校）を出たばかりであることなどを話した。「私」をはじめとする生徒たちは、先生らしくない挨拶に驚くとともに、親しみを感じた。しかも、「大倉先生」は「私」たち尋常三年生の受持になるというのだから、喜びはひとしおであった。

「尋常三年生」などの語句から、この小説は昔の日本を舞台にしたものであることがわかる（原典では「明治四十五年」の設定となっている）。学校の先生が「詰襟服の毬栗頭」であることに違和感をもった人もいたかもしれないが、かつての日本で「詰襟服」は多くの大学や「師範学校」の制服であり、もともと軍人の髪型であった「毬栗頭」も男子学生の間に広く普及していた。「大倉先生」は「学校を出たばかり」なので、こうした姿で職場である尋常小学校に赴いたとしてもおかしくはないのである。ただ、自分の家が貧乏であったことを率直に語る「大倉先生」の挨拶の内容は、生徒たちに「こんな新任の挨拶は初めて」と思わせる新鮮なものであったようだ。ちなみに、明治時代の終わり頃に義務教育（尋常小学校修了まで）より上の学校に進学する人は全体の一割にも満たなかったというから、師範学校にまで通って学問を修めた先生は、現代と較べものにならないほど希少な存在であり、周囲の信頼も厚かったと考えられる。そうしたいわばエリートであるにもかかわらず、自分からわざわざ家が貧乏だった話をするところに、「大倉先生」の飾らない人柄が表れていると言えるだろう。一部を除いて決して裕福とは言えない家庭で育てられている「私」たち生徒が、初対面ながらも大倉先生に「親愛を感じた」のは、こうした理由があるからなのである。

Ⅱ　大倉先生と桜の花びら（11行目「大倉先生の授業がはじまって……」～22行目「昨日のことのように頬がほてる。」）

「私」は張り切っていた。二年生の時の成績が芳しくなく、父親に納屋に押し込められてこっぴどく叱られたので、今年こそは勉強して良い成績をとらなければならなかったのである。しかし、家へ帰ると妹の子守や内職を手伝わなければならず、とても勉強などできなかった。したがって、学校での授業中にすべてを理解し身につけなければならなかった。

ここでは「私」の家庭の様子が垣間見える。現代と違って保育所などが未整備だった時代は、年長の子どもが弟妹の面倒を見たり、よそから子どもを「子守奉公」として雇い入れたりするのが一般的であった。また、紙袋貼りは、巻煙草やマッチの箱貼り、足袋や鼻緒を縫う裁縫仕事などと並んで、貧しい家庭で一般的に行われていた内職のひとつであった。「私」は放課後は子守、夜はカンテラ（＝手提げ用のランプ）の明かりの下で紙袋貼りを行う労働力として重宝されていたのである。

家で勉強する暇がない「私」は、なんとか成績をあげようと、学校の授業に気合十分で取り組んでいた。ある日の修身（＝今の「道徳」に相当）の時間、教室の窓から桜の花びらが舞い込んできた。一年生と二年生のときに、勉強の邪魔になるものはすぐさま排除し、勉強に集中するよう教えられていた「私」は、すぐに花びらを勉強の邪魔と判断し、ガラス窓を閉めた。すると「大倉先生」は「花見をしいしい勉強するのも面白えじゃないか」と、花びらが舞い込むのにまかせようと言うのである。「私」は「耳の根まで真赧になって」、すぐさま窓を開け直した。このことは、大人になった今思い出しても顔がほてるほど心に残っている。

この場面では、貧しい家庭に育った「私」の勉強への思いと、花見をしながら勉強しようと言う「大倉先生」のおおらかな様子を正確に読み取っておこう。

Ⅲ　平等で理性的な大倉先生の授業（23行目「これより、多分一週間か十日か後のことであった。……」～59行目「……私はかえって憎らしさをさえ感じた。」）

ある日の読方（＝今の「国語」）の時間、「自分のことを自分で言う言葉」を挙げるよう先生が指示した。「じぶん」「わたし」「わたくし」など様々な答えが挙がったが、最後に指名された「私」は「おらとも言います」と答えた。すると、教室中に爆笑の渦がわき起こった。元級長の「山本春美」によると、「おら」は「下品な言葉」だから使ってはいけないと言うのである。ところが、「大倉先生」は平然とした態度で、他の答えと同様黒板に「おら」と書き加え、それでも食って掛かる「山本春美」に対して「使っちゃよいか悪いか、そんなことを今しらべとるのじゃない」と一蹴した。それを境に教室中が「私」の味方についたよ

うに思え、その級友たちの「豹変ぶり」に「私」は不快な気持ちを抱いた。

このエピソードからは、授業中は学問的に公正な態度に徹する「大倉先生」の姿が浮かび上がってくる。「自分のことを自分で言う言葉」という質問なのだから、「おら」も「じぶん」「わたし」などと同様、充分答えになるはずだ。しかし、「おら」に対してだけ級友たちが嘲笑したのは、「山本春美」が言うようにそれが「下品」で田舎臭いイメージを伴う言葉だったからだろう。しかし、「大倉先生」はそうしたことは気にも留めず、正しい答えの一つとして認めたのである。言葉とその社会的評価を切り離し、答えとして成立するものは平等に認めようとする公正な態度だと言えるだろう。

また、この場面では「山本春美」についても目を向けておこう。彼は「学校中でただ一人靴をは」くことができる「村一番の分限者（＝財産家）」の息子であり、そのために先生に贔屓され、かつては級長をつとめていた。一人だけ贅沢な服装をし、先生たちをも味方につけた「山本春美」は、教室の中でも目立つ存在であっただろう。そのうえ彼は級長という「職権をかさにきて生徒の並び方が悪いと言って編上靴で……私達の素足を蹴って歩」くような鼻持ちならない（＝不愉快な）人物であり、皆が困っていた。ところが「大倉先生」は贔屓をしないので、彼はいま級長でも副級長でもない「平の生徒」になっている。さらに今回も自分の意見を言い立てようとする彼を、先生はピシャリと言って黙らせたのである。生徒の家が金持ちか貧しいかで態度を変えるようなことを決してしない「大倉先生」に、「私」はますます親愛の情を深めたのである。

Ⅳ　遠足にて（60行目「そのうち四月が過ぎて五月になり、……」～106行目「……さっさと大股に私達を追い越した。」）

一年に一度の遠足の日が来た。「私」は父親に五銭の白い銅貨を一つもらったが、あまりに少ないと不満を言うと、母親が一銭の赤銅貨を五つ渡してくれたので、計十銭の小遣いを手に入れた。

物の価値が変動しているのでお金の価値を単純比較することはできないが、当時の十銭は今のお金ではおおよそ五百円程度と考えてよい。そうしたお金さえ出し渋る父親の姿からは、「私」の家が貧しく切り詰めた生活を送っていることが伝わってくる。

それでも遠足は、家や学校から離れ、小遣いの範囲で好きな買い物ができる貴重なチャンスであった。「私」は「一張羅の着物」に弁当を背負い、「紙緒の藁草履（＝鼻緒の部分が紙で作られた藁草履。貧しい庶民にとって一般的であった）」という出で立ちで、「大倉先生」に連れられてうきうきと出かけた。

目的地の笠岡に着いて皆で弁当を広げたとき、「私」は他の人の弁当を細かく観察している。「山本医院の春美だけが一人巻鮨を持って来ている」、「大倉先生は矢張り握飯」だが、大半は「梅干や沢庵」をおかずにするところを、「目刺を持って来てい」る点が「何と言っても先生だけのことはある」といった表現からは、貧富の差を敏感に感じ取る「私」が「大倉先生」には敬意を抱いている様子が伝わって来る。

食後の自由時間、生徒たちは買い物するため一斉に「物売り茶屋」に向かった。「分限者」の「山本春美」は、近づいてくる者に気前よくお菓子を配っている。「私」はそれを横目で見ながら飴玉や遊び道具を買ったが、咽喉を潤すために買った「蜜柑水」があまりにおいしいので、残りの小遣いをはたいて壜入りの「蜜柑水」を買い、妹たちに飲ませてやろうと考えた。

「蜜柑水」とは、明治から大正時代に駄菓子屋で広く売られていた無果汁の清涼飲料水。このほかにもこの場面には「煙硝紙（＝紙火薬のこと。子供の玩具のひとつ）」や「御歯黒（＝かつての風習で、既婚女性が歯を黒く染めること）」など、時代の風物が次々と登場する。しかし、子供たちが駄菓子屋にたむろして小さなお菓子やおもちゃを手に入れる楽しさは、今も昔も変わらないだろう。「私」も夢中で買い物をしていたのだが、不意に家で待つ妹たちのことを思い出し、本来なら自分のためだけに使えるはずの小遣いをはたいて土産を買うのである。その後「私」がひとりで松林の中に入って「蜜柑水」の壜を包んでいるところから、遠足で土産を持ち帰ることで、人目につくことを心配している気持ちがうかがえる。「大倉先生」は帰り道でそうした「私」の事情を知るが、何も言わずにただ追い越していった。

Ⅴ　家に帰りついて（107行目「途中何べんも休んで、……」～本文末）

家に帰り着いた「私」は得意になって土産の「蜜柑水」の包みを家族のいる座敷に放り投げた。しかし、父親は怒りに顔をゆがめて怒鳴った。「蜜柑水じゃ？そがんなもん、貧乏人が買うもんと違うじゃなえか？（＝そのようなものは、貧乏人が買うものではないのではないか）――戻して来い。――そがんな心掛じゃけん、学校で丙ばあ取るんじゃ！（＝そんな心がけだから学校で丙ばかり取るのだ）」父親の言葉からは、「貧乏人」として身の程をわきまえ、慎ましく暮らすべきだという考えがはっきりわかる。壜をいれて四銭

の「蜜柑水」も、父親には「葡萄酒かシャンペンか」といった贅沢品と同様、「貧乏人」が手に入れるようなものではないと思えたのである。

たかが子供の買い物程度でそこまで怒る必要はないと思うかもしれない。しかし、この小説が舞台としている明治大正期は、現代よりもずっと貧富の格差が激しく、貧しい人の数も多かった。義務教育である尋常小学校の就学率は明治終わりに九割を超えていたが、そのぶん学校は裕福な家の子供と貧しい家の子供を横並びにする場所でもあったのである。ここでの父親の態度を好意的に捉えるなら、学校生活で裕福な家の子供に感化された「私」が贅沢に慣れ、貧しさに耐えられないという事態に陥らないように、身の程をとくと言い聞かせた、ということもできるだろう。

そうだとしても、父の怒りは「私」にとって衝撃であった。珍しい土産を家族が喜んでくれるだろうとばかり思っていた「私」は、予想もしなかった展開に驚き、かなしんだ。「蜜柑水」にありついた幼い妹たちも、本当は喜びを素直に表現したかったかもしれないが、父親の様子をうかがいながら気を遣って飲まなければならなかった。そんな様子を「私」はただ黙って眺めるよりほかないのであった。

【設問解説】

問1　語句の意味を答える問題

この問題は、基本的には語句そのものがもつ意味（辞書的な意味）を問う知識問題である。本文の文脈にとらわれすぎると正解にたどりつけないことがあるので注意が必要だ。

(ア)「職権」とは〈職務を遂行するうえで認められている権限〉。「かさにき」るとは〈自分の地位や権力をもつ後援者などを頼みにして威張ること〉。よって「職権をかさにき」るとは、〈職務上の権限を利用して威張る〉という意味になる。正解は②。①は「役割に反して」、③は「責任を果た」すという部分が「かさにき」るという言葉と合わない。④は多少迷うが、「ひけらかす」すが〈見せびらかす〉の意であることを考えると、「かさにき」るとは少しずれているとわかる。⑤の「投げ打」つは〈惜しげもなく捨ててしまう〉の意であり、「かさにき」るとは異なっている。

(イ)「一張羅の着物」とは〈その人の持っている着物のなかで最もよい着物。かけがえのない一枚きりの着物〉の意。よって正解は③。①は「お気に入り」というだけでは「一張羅」の意味にはならない。②は「一張羅」の意味とまったく異なっている。④「新しい」、⑤「派手な柄」という意味は、「一張羅」にはない。

(ウ)「おのの」くとは〈恐怖や寒さ、興奮などのためにからだや手足がふるえること〉。よって①が正解。②「驚いた」、③「ひるんだ（＝気おくれした）」、⑤「喜んだ」はいずれも内面の動きだけを指す言葉であり、「おののいた」がもつ〈からだや手足のふるえ〉が説明できない。④「引き下がった」は〈その場から退いた〉という意味であり、まったく異なっている。

問2　大人になった「私」が傍線部のような心情を抱く理由を答える問題

傍線部は、「私」が「大倉先生」に窓を開けておくように言われたときの心情が、大人になった「今」でも「昨日のことのように」よみがえる、という内容である。注目したいのは、それまでの子供時代の描写とは異なり、この傍線部は大人になった「今」の視点で書かれていることである。このことを念頭におきつつ、傍線部に関連する内容を整理してみよう。

まず、傍線部の心情を引き起こすきっかけとなった出来事は11行目「大倉先生の授業がはじまって間もない日のことであった。……」からの場面で描かれていることに目を向けよう。家では子守や内職の手伝いをしなければならず勉強する時間がとれない「私」は、成績をあげるために、せめて学校の授業では「精一杯に緊張」して「一所懸命に前を向いて」いようと心に決めていた。そんなある日、授業中に開け放たれた窓から桜の花びらが舞い込んでくる。授業に集中しようと必死だった「私」は、前の学年のときにそう躾けられていたこともあって、桜の花びらが勉強の邪魔になると判断し、すぐさま硝子窓を閉めた。すると「大倉先生」は、「花見をしいしい勉強するのも面白えじゃないか」と笑いながら言って、また窓を開けさせたのである。これによって「私は耳の根まで真赧にな」り、大人になった「今」でも「頬がほてる」ほど強い印象を受けることになった。

このときなぜ「私」は顔を赤くしたのだろうか。単にみんなの前で先生に注意されたことが恥ずかしかったというだけでは、大人になってからも「昨日のことのように頬がほてる」ほど強い印象が刻みつけられるとは考えにくい。窓を開けておくように言う「大倉先生」の言葉を聞いて、「私」は自分の行動を振り返り、深く反省したからこそ、いつまでも心に残っているのではないだろうか。机の上に舞い落ちる桜の花びらを勉強の邪魔になると即断し排除

してしまおうとするよりも、「大倉先生」のように「面白え」と言って愛でる態度の方が人間として豊かであると言える。以前の先生にそう教え込まれていたからとはいえ、さも正しいことをするかのように硝子窓を閉め、桜の花びらを自分の頭から切り捨てていた狭量な自分を、「私」は恥ずかしく思い、大人になった「今」も深く恥じ入っているのである。

以上をまとめると、解答のポイントは次のようになる。

a　「私」は前の学年のとき、先生に勉強の邪魔になるものは排除するよう躾けられていた

b　三年生になった「私」は、成績をあげるために授業に集中しようと頑なに考えており、桜の花びらを即座に勉強の邪魔と判断した

c　「大倉先生」の発言は、桜の花を愛でながら勉強するのもよいとする余裕を感じさせた

d（**c**により）「私」はそれまでの考え（**a**・**b**）を恥ずかしいと感じた

こうした4つのポイントを踏まえているのが、正解④である。ちなみに「狭量」とは〈人や物事を受け容れる心が狭いこと〉、「杓子定規」とは〈すべてを一つの規則にあてはめて考えようとし、融通がきかない態度〉のことである。

①は、「指示されるより前に窓を閉めれば先生に褒められて評価を上げてもらえるのではないか」と「私」が考えた根拠が本文中に見当たらない。家で勉強する時間がない「私」にとっては「先生に褒められ」ることよりもむしろ授業に集中する方が大事であったと考えるべきだろう。

②は、まず「級友たちのことを考えて」窓を閉めたとしている点が誤り。「私」は自分の勉強の邪魔だと判断して窓を閉めたのであり、周囲の級友を慮ったという根拠はない。また、「体面がつぶされてしまった」ことを「私」が気に病んでいると考えられる根拠も、本文には見当たらない。

③は、「先生に気に入られたい一心で行動していた」という説明が誤り。教室の窓を閉めたのは、「先生に気に入られたい」というよりもむしろ、舞い落ちる花びらが自分の勉強の邪魔になると考えたからである。また、「先生の事情も顧みず身勝手な思いを押しつけていた」の部分も、本文中で「大倉先生」に顧みるべき「事情」があったとは述べられておらず、根拠のない説明になっている。「忸怩たる思い」とは〈深く恥じ入る思い〉の意。

⑤は、まず「別の先生」すなわち「大倉先生」に「勉強よりも美しいものを愛でることが大切だと教えられ」てはいないので、誤り。「大倉先生」は「花見をしいしい（＝花見をしながら）勉強するのも面白」いと言ったのであり、勉強と花見を比較して花見を優先するように述べたのではない。また、「私」が「大人たちにふりまわされた」ことに「憤り」を覚えているという根拠も本文にない。

問3　「私」が傍線部のような心情を抱く理由を答える問題

まず、傍線部の表現をよく確認しよう。傍線部冒頭「その豹変ぶり」とは、傍線部直前の「さっきまで私を嘲笑していた五十人の級友は、ことごとく私の味方になったかの如く思われた」という変化を指している。「私」にとってこれは一見喜ばしいことのようだが、逆に「私」はそうした級友たちの態度に「憎らしさ」を感じたというのである。それはどういうことなのか。傍線部に関連する内容を整理してみよう。

この問題に直接関わるのは、23行目「これより、多分一週間か十日か後のことであった。……」から始まる「読方」の時間を描いた場面である。「自分のことを自分で言う言葉」についての授業での「私」の回答に対し、級友たちは「爆笑」し、教室中が「嘲笑に似た渦巻」に包まれた。彼らは「私」をばかにしたのである。一人立ち上がって抗議した「山本春美」の次の発言は、級友たちの考えを代表するものといえる。「先生、おらと言うのは下品な言葉です。そんな言葉を使っちゃいけんと、串本先生が言われました」。つまり、「山本春美」もその他の級友も、「私」が回答した「おら」という言葉が下品だと言うのである。しかも、以前の担任「串本先生」がそう言ったからという理由だけでそう決めつけているのである。理不尽な話ではあるが、「私」は「赧くなって俯向」くことしかできないでいた。

そんな時、「大倉先生」は素知らぬ顔で「私」の答えを他の答えと同様に認め、「山本春美」の抗議も一蹴してしまった。「使っちゃよいか悪いか、そんなことを今しらべとるのじゃない」という「大倉先生」の言葉は、「自分のことを自分で言う言葉」は何かという質問に〈良い／悪い〉という社会的評価を持ち込むな、という冷静な判断を述べたものであると同時に、窮地に陥った「私」を救う効果をもつものであった。「大倉先生」のひとことをきっかけに、級友たちは一気に「私の味方」になった。ここで、「私」は「たわいのないもので、全く人間という奴はたわいのないもので」と繰り返している。

級友たちの姿は、自分自身の考えを持たず、上の立場にある者の言動をきっかけにすぐさま態度を一変させてしまう「たわいのない（＝「たわいない」「たあいない」とも言う。正体がないこと。しっかりした手応えや張り合いがないこと）」人間のありようを示すものでもあったのである。

こうしたことから、解答のポイントは以下のように整理できる。

a　級友たちは、はじめ「私」をばかにしていた

b　「大倉先生」が「私」の発言を認める言動をとった

c　級友たちは、一転して「私」の味方になった

d　「私」は級友たちの姿に、たわいのない人間のありようを見て「憎らしさ」を感じた

こうしたポイントを全て押さえている⑤が正解。「権威におもねる」とは〈権威を持つ者が気に入るように振る舞う〉の意。級友たちは「大倉先生」の言動に合わせて態度を変えたのだから、ここでの「権威」である「大倉先生」に「おもねる小狡さ」を持っていると言うことができる。

①は、「元級長の春美の意見に便乗して私を軽蔑し」という部分が誤り。級友たちは、私の「おら」という答えを聞いた時点で爆笑したのであり、「山本春美」の発言に「便乗し」たのではない。

②は、「級友たちが今度は春美を愚弄しはじめた」という部分が本文には描かれていない内容である。「愚弄」とは〈人をばかにしてからかうこと〉。

③は、「先生の一喝（＝ひと声、大声でしかりつけること）」という表現が本文の「小さくはあるが底力のある声」という「大倉先生」についての描写に合わないし、「級友たちがむしろ哀れに思え」たとする根拠も本文にない。さらに、「抑圧的な教育に怒りを感じた」という部分も級友たちの「豹変ぶり」に対して「私」が感じた「憎らしさ」について述べた傍線部の説明として的外れである。

④は、「春美に対する嫌悪感が募った」の部分が、やはり傍線部における「憎らしさ」の対象とずれてしまっている。

問4　傍線部を踏まえて「山本春美」の人物像を答える問題

設問をよく見てみよう。これまでの設問とは違って、この問題では「山本春美」という人物に焦点が当てられている。こうした形式で問われたときは、傍線部の内容を考慮に入れるのはもちろんであるが、本文全体で「山本春美」という人物がどのように描かれているかも広く視野に入れ、選択肢を吟味することを忘れないようにしたい。ここでは、ひとまず傍線部の表現は後回しにし、本文で「山本春美」が登場する箇所を順を追って整理することにする。

本文で初めて「山本春美」が登場するのは、**【本文解説】Ⅲ**や**問3**でも触れたように、23行目から始まる「読方」の時間の場面においてである。47行目「見ると、それは山本医院の二番息子の山本春美であった。……」以下の部分から、「山本春美」について整理すると、次のようなポイントが得られる。

a　村一番の分限者の息子であり、そのことで先生に贔屓（ひいき）され級長になったこともあった

b　ときには権力をかさにきて横暴な振る舞いを見せることもある

また、この場面で「山本春美」は「私」の「おら」という回答について「大倉先生」に抗議している。その内容や先生とのやりとりから、次のようなポイントを得ることもできるだろう。

c　串本先生の言うことを鵜呑みにして、その考えを新任の大倉先生にも押しつけようとした

次に、60行目「そのうち四月が過ぎて五月になり、……」から始まる遠足の場面に目を向けよう。彼の弁当がひとりだけ「巻鮨」である（72行目）ことから彼が「分限者」の息子として羽振りが良いことが伝わって来る（前出の**a**ポイント）。次に、傍線部に目を向けると、「山本春美」は「大倉先生」が弁当を食べ終わり、食い残しを新聞紙にまるめるのを見た途端、それを「芥溜場」に捨ててくると申し出ている。傍線部の「間髪をいれず」という表現から、彼が先生に声をかけるタイミングを見計らっていたことがわかるので、よほど「大倉先生」のご機嫌を取りたいと考えた上での行動であることがわかる。

d　先生には基本的に付き従い、取り入ろうとする

傍線部の後の自由時間の描写からも、「山本春美」の人物像が浮かび上がってくる。「分限者」である彼は、「煉羊羹のような」お菓子をたくさん買って、「仲のよいものや力の強そうなものに分配し」ている。こうなると、たとえ普段は悪口を言って敵対する間柄にあっても、お世辞を言って菓子をもらおうと近づいてくる者が出てくるだろう。それでも「山本春美」は「お世辞というものは言われてみると嬉しいもの」と受け止め、「一様にこころよく」お菓

子を分配したという。このことから、次のようなポイントが得られる。

e　仲の良い者、力の強い者、自分に近寄ってくる者には気前よく振る舞う

こうしたポイントのうち、部分的に重複している**a**と**b**、**d**と**e**などをコンパクトにまとめたのが正解の②である。ちなみに、「如才なく取り入」るは〈抜かりなく相手の機嫌をとる〉、「世知に長けた」は〈世渡りの知恵を身につけた〉の意。

①は、「心の奥底では級友や先生に対する細やかな配慮を忘れない、心のやさしい人物」という部分が誤り。「山本春美」が「配慮」するのは「仲のよいものや力の強そうなもの」と自分にお世辞を言って近づくもののみであり、それを「心のやさしい人物」とは言えない。

③は、「いったん自分の間違いに気づくと素直に考えや態度を改めるような、柔軟な一面も有する人物」という部分が誤り。確かに「山本春美」は「大倉先生」に対する態度を変えてはいるが、それが「自分の間違いに気づ」いたからだと言える根拠は本文にない。

④は、「将来医業に就くことを親に強いられている」という内容が本文には書かれていない。したがって、成績をあげるために「先生の機嫌取りに汲々としている（＝一心に努めている）」と言う論理も成立しない。

⑤は、「大人の前ではいつも自分を抑えて良い子としてふるまおうと努める」の部分が誤り。「読方」の時間に彼はむしろ「大倉先生」に食って掛かっていた。

問5　傍線部における「私」について答える問題

まず傍線部に目を向けると、土産の「蜜柑水」を飲む妹たちの姿を「ぼんやり眺めて」いる「私」が描かれていることがわかる。「ぼんやり」している理由は、妹たちが「父親の顔を盗み見しいしい」「蜜柑水」を飲んでいることと関連する。なぜ「私」や妹たちが、「父親の顔」をうかがわなければならない事態になったのかを整理してみよう。

遠足で飲んだ「蜜柑水」のおいしさに感激した「私」は、「兄さん、笠岡へいったら、土産を買うて来てなあ」と頼んだ妹の顔が目に浮かび（90・91行目）、残っていた小遣いをすべて費やして壜入りの「蜜柑水」を土産に買った。本文中でも何度か描かれているように、「私」の家は裕福ではない。妹たちも「私」も倹（つま）しい毎日を送っているのである。「こんなおいしい飲物は家の者は誰もまだ知らないだろう。それを買ってかえって皆んなに味を知らせてやろう。妹のうれしそうな顔がちらちらと目の前で笑った。」（94・95行目）といった記述から、「私」が純粋に家族を喜ばせたい一心で「蜜柑水」を購入したことがわかる。

それなのに、家に帰り着いて土産を取り出したとたん、親父に罵声を浴びせられた。「そがんなもん、貧乏人が買うもんと違うじゃなえか？　――戻して来い。」と怒鳴りつける父親は、「私」のささやかな家族への思いに耳も貸そうとせず、ただひたすら家の貧しさを強調した。おまけに以前成績が悪かったことまで「心掛」の問題として持ち出される始末である。「私」にとって「全くそれは予期しない」反応であり、自分の行動を罵声とともに全否定され、「かなし」みに襲われた。二人の妹たちもそうした状況を目の当たりにし、「蜜柑水」にありついたこと自体は嬉しくても、素直にそれを表してはならないと悟ったのだろう。父親の様子をチラチラ気にしながら、二人で茶碗に分け合って「蜜柑水」を飲む妹たちの様子を、「私」はただ「ぼんやり眺め」ること以外に何もできなかったのである。

以上のような内容から、次のようなポイントを導くことができるだろう。

a　「私」は家族においしい「蜜柑水」を飲ませてやりたいと思い、土産として購入する

b　「私」は家族が喜んでくれると予想していた

c　（**b**に反して）父親に贅沢だと叱られる

d　「私」はかなしい気持ちになり、呆然としている

これらのポイントをまとめている③が正解である。

①は、「もっと役立つ物のためにお金を使うよう諭す父親の言葉で」以下の部分が誤り。父親は「蜜柑水」が貧乏人にふさわしくない贅沢な品物であること、そうしたものを買ってくる「私」の「心掛」が間違っていることなどを述べたのであり、「役立つ物」にお金を使えとは言っていない。

②は、「妹たちがうれしそうに……飲む姿を見て、自分の考えが決して間違ってはいなかったと満足してもいる」の部分が誤り。まず、「妹たち」は「うれしそうに」「蜜柑水」を飲んだと言えるかどうか不明であるし、「私」が自分の考えの正当性を確信して「満足し」たと言える根拠も本文にはない。

④は、「級友たちのからかいにも耐え」という部分に根拠がない。遠足からの帰り道、近くにいた級

友が「私」のことを「大倉先生」に説明してはいるが、それを「からかい」と言えるかどうかは疑問である。また、「私」が「ぼんやり」しているのが「貧しい暮らしのみじめさをかみしめている」せいばかりとは確定できない。

⑤は、「見栄を張るために高価な土産を買ったと叱る父親」とあるが、父親は「蜜柑水」は貧乏人にふさわしくないと言ったに過ぎず、「見栄を張るため」だと決めつけてはいない。また、「私」がそうした父親に対して「反発心を抑えきれない」という根拠も本文にはない。

問6　本文の表現について答える問題

近年、大学入試センター試験の小説問題では、**問6**で本文における具体的な表現に関わる出題が続いている。主観的なイメージで解答を選ぶのではなく、選択肢の一つ一つの説明を本文と照合しながら丁寧に検討し、消去法で確実に解答を選ぶよう心がけよう。

①は、「私」が「大倉先生」に「親愛の情を深めていく」という本文全体で一貫して描かれている心情について触れている。また、「大倉先生」の挨拶の場面、「修身の時間」、「読方」の時間、遠足での出来事など複数の場面によって本文が構成されていることは明らかであり、「いくつかのエピソードを通して」描かれているという部分も誤りではない。よって、これが一つ目の正解である。

②について。本文には、「分限者」である「山本春美」や「私」をはじめとするその他の登場人物たちの「階層の違い」が描かれていることは間違いないのだが、「山本春美だけは標準語を話し、他の者は方言を話している」としている部分が誤り。たとえば46行目の「山本春美」の発言「そんな言葉を使っちゃいけんと、串本先生が言われました」は、明らかに方言である。

③は、「そのことが生徒たちの同情を買い、信頼を得る」の部分が誤り。「大倉先生」は確かに新任の挨拶で自らの貧しい家の事情を語ったが、それに対して生徒たちは「同情（＝相手をいたわる気持ちになること）」したのではなく、「親愛の情」を感じたのである。

④について。「カンテラの明りで紙袋貼り」は、明治大正時代の貧しい家庭で広く行われていた内職である。現代では工場での機械作業がほとんどで「紙袋貼り」を内職として行う家はほとんど見られない。また、家庭用電気機器がほぼ全家庭に普及している現代、「カンテラの明り」を自宅で灯すことも普通はないだろう。「春美は学校中でただ一人靴をはいていた」という表現からは、靴をはくことがまだ一般的ではない時代であったことがうかがわれる。他の子供たちは「紙緒の藁草履」などをはいて学校に通っていたのである。したがって、こうした表現から「小説の背景となっている時代の状況や社会のありよう」をうかがい知ることができる。これが二つ目の正解である。

⑤について。「たわいのない」という表現を繰り返すことで、「私」が「たわいのない」人間について嘆いていることはわかるが、だからといってそうした「人間のありように絶望し」ているとまで言える根拠がない。むしろ、そうした「たわいのない」人間のありようをユーモアの混じった視点からしみじみ描くのがこの文章の特徴であると言うこともできる。

⑥について。「私」が「三造さん」と比べて遠足に持って行く小遣いの金額が少ないことを言ったのは、62行目で「（五銭白銅一つしか貰えないのが）如何にも残念でたまらなかった」などの記述を見れば、せっかくの遠足で小遣いは多い方がいいという思いがあったからだと考えられる。「蜜柑水は壜ごとでも売ってくれるかな？」という発言は、土産として家に持って帰りたいという考えからのものである。これらの「私」の発言から「体裁（＝外見や世間体）を気にする『私』の性格」がわかるとは言えない。

第3問　古文

【出典】

『平家物語』巻第三・少将都帰

成立　鎌倉時代前期

ジャンル　軍記物語

作者　未詳（『徒然草』に信濃前司行長の名があげられているが、諸説がある）

内容　「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす」と語り出される、平家一門の盛衰を綴る物語である。

一一三二（長承元）年、平清盛の父忠盛が、武士として初めて宮中の殿上の間に昇ることを許された記事から始まり、前半では清盛を中心とする平家一門の繁栄と、そのおごり高ぶった様が描かれる。一一七七（治承元）年、後白河院の近臣たちは、京都の鹿ケ谷で平家討伐の謀議を行うが、その計画は露見してしまい、失敗に終わった。さらに、一一八〇（治承四）年には、源三位頼政が挙兵するのだが、それも失敗に終わった。しかし、その際に発せられた以仁王の令旨が、それまで各地で息をひそめていた源氏の蜂起を促すことになる。

翌一一八一（治承五）年、清盛が病死すると、平家は没落の一途をたどり始める。木曾義仲が軍勢を率いて入京し、平家は都を追われる。源義経の軍勢に一の谷で敗れ、瀬戸内海に船を浮かべ、西へと落ちてゆく。さらに、屋島の戦いでも敗れ、ついに一一八五（文治元）年、壇ノ浦で滅亡するに至った。平家と運命をともにした安徳天皇は壇ノ浦に沈み、同じく入水したものの助けられ、捕らわれの身となった安徳天皇の母建礼門院は、出家して、洛北大原で平家一門の菩提を弔うのであった。

漢語を多用した和漢混淆文が中心であるが、登場する女性が涙を流すような場面では和文が用いられ、文体が効果的に使い分けられている。「平曲」として琵琶法師によって語られ、広く愛好された。

なお、今回の本文は、小学館の『新編日本古典文学全集』所収のものによったが、読解の便宜を図り、一部省略したり、表記を改めた箇所がある。

【本文解説】

今回の本文は、**【出典】**でも触れたが、一一七七年に起こった、「鹿ヶ谷の陰謀」と呼ばれる、後白河院の近臣たちによる平家討伐計画にまつわるものである。

治承元年、後白河院の近臣たちは、京都の東山、鹿ヶ谷にあった俊寛僧都の山荘に集まり、平家討伐の計画をめぐらしていた。大納言藤原成親を始めとして、西光法師、平康頼、俊寛僧都、成親の子の少将成経らである。院自身が臨席することもあり、院を警護する北面の武士たちも参加していたのだが、その中の一人多田行綱が平清盛に密告したことによって事は露見し、参加していた人々は捕らえられた。西光法師は斬られ、藤原成親は備前の国に配流され、その後に惨殺された。成経と平康頼、俊寛僧都は、鬼界ヶ島に流された。鬼界ヶ島は、九州薩摩半島の南方にある硫黄島とも、薩南諸島とも言われる島のことだが、当時の都人にとっては最果ての地、絶海の孤島と感じられ、故に流刑地となっていた所である。

翌年、恩赦によって成経と康頼入道（平康頼は鬼界ヶ島に至る途中で出家していた）は赦免されるが、俊寛僧都は許されなかった。明けて治承三年、成経と康頼入道は、浦伝い島伝いして京の都に帰る道すがら、備前の国で、成経の父大納言成親が住まわされていた家を訪ね、大納言の残した手跡を見て泣き、その墓を訪ねて弔うのだった。今回の本文は、その後、成経と康頼入道が無事に都に帰ってきた場面である。

三月十六日、成経と康頼入道は鳥羽に着く。鳥羽には大納言成親の山荘である洲浜殿があった。荒れ果てた洲浜殿に足を踏みいれた成経は、そこで亡き父を偲んで涙を流し、古歌に託して父を慕う気持ちを表す。成経の悲しみに、康頼入道も心打たれ、また涙を流すのであった。あまりの名残惜しさに、成経と康頼入道は、そこで一夜を明かす。そして迎えの牛車に乗り、二人は入京するが、康頼入道は、苦難の日々をともに過ごした成経と別れがたく、いつまでも名残を惜しむのであった。その後、成経は、妻の父である平宰相の邸を訪れ、家族との再会を果たすが、母は成経を見るや、「命あれば」と口にし、成経に会えた喜びはあるものの、同じ事件によって帰らぬ人となった夫のことを思い、泣き臥してしまった。人々はみな再会の涙にくれるが、乳母の六条は悲しみのあまりに黒髪もすっかり白髪となり、美しかった北の方はやせ衰えて別人のようになってしまっていた。そして、成経が流される時には北の方のお腹の中にいた子が生まれて、三歳ほどまでに育っていた。成経は、その子を見て、よくぞ無事に育ったことよと、流される当時の北の方の苦しそうだった様子を思い出し、また悲しみにくれるのだった。この鹿ヶ谷の事件によって、一家が失ったも

のはあまりに大きく、彼らを襲った苦難が計り知れないものであったことがうかがわれる内容となっている。

以後、成経は再び院に召し使われる身となり、康頼入道は、東山双林寺の山荘に落ち着き、『宝物集』を書いたのであった。

【全文解釈】

同じ三月十六日、少将は、鳥羽へ明るいうちにお着きになる。亡き大納言の山荘が、洲浜殿といって鳥羽にある。住み荒らして年月がたってしまったので、築地（＝土を塗り固めた塀）はあるけれども（その上にあったはずの）屋根もなく、門はあるけれども扉もない。（少将が）庭に立ち入りご覧になると、人が通った跡は途絶えて苔が深い。池のほとりを見回すと、（鳥羽離宮の）秋の山から吹く春風に、白波がしきりに寄せては返し、（羽根が）紫色のおしどりや白いかもめがあちこちで遊んでいる。（それらを）楽しんだ人（＝大納言）の恋しさに、尽きることのないものは涙である。家はあるけれども羅門はこわれて、蔀や遣り戸もまったくない。「ここには大納言殿が、そのようにお過ごしになっていた。この妻戸を、このように出入りなさった。あの木を、自身で植えなさった」などと言って、何か言うにつけて、父のことを恋しそうにおっしゃった。三月の十六日であるので、花はいまだに残っている（＝咲いている）ものもある。昔の主人（＝大納言）はいないけれども、春を忘れない花であるよ。少将は、花の下に立ち寄って、

もし昔なじみの地の花がものを言う世の中であったならば、どんなにか昔のことを尋ねただろうに。

この古い歌を口ずさみなさると、康頼入道も、折も折だけにしみじみと悲しく思われて、僧衣の袖を涙で濡らした。日が暮れる時までとは（出発を）待ちなさっていたけれど、あまりにも名残惜しくて、夜が更けるまでおいでになった。（夜が）更けていくにつれて、荒れた家屋の常として、古い軒の板の隙間から、漏れる月の光が明るくかげりがない。山村の夜は明けようとするけれども、家路をまったく急ぐ気にはなれない。

そのままここにいられるわけでもないので、迎えに乗物をよこして（人々が）待っているようなのも（＝待たせるのも）思いやりがないということで、泣く泣く洲浜殿を出て、都へ帰り入りなさったという（二人の）心の中は、さぞかししみじみ悲しくもうれしくもあっただろう。康頼入道の迎えにも、乗物が来ていたけれど、それには乗らないで、今改めて名残が惜しいのでと、少将の車の後ろに乗って、七条河原までは行く。そこから別れたが、それでもやはりすっかり（去って）行くこともできなかった。花の下の半日（ともに過ごしただけ）の客、月の前の一夜（をともに過ごしただけ）の友、旅人がにわか雨の過ぎゆく時に、一本の木の陰に立ち寄って（ともに過ごし）、別れる名残も惜しいことだよ。ましてこの（少将と康頼入道の）場合は、つらかった島での暮らし、船の中波の上（でともに過ごした）、一業所感の身であるので、前世の縁も、つい深く思い知られたのであろうか。

少将は、舅である平宰相の邸にお入りになる。少将の母上は、霊山にいらっしゃったが、昨日から宰相の邸にいらっしゃってお待ちになっていた。少将が入っていらっしゃる姿を一目見て、「命があるので」とだけおっしゃって、衣をかぶって（泣き）臥しなさる。宰相の邸の女房、侍たち、集まって、みなうれし泣きをした。まして少将の北の方、（少将の）乳母の六条の心の中は、さぞかしうれしかっただろう。六条は尽きることのないもの思いに、黒かった髪もみな白くなり、北の方は、あんなにも華やかで美しくいらっしゃったのに、いつのまにかやせ衰えて、その人ともお見えにならない。（少将が）流されなさった時、三歳で別れた幼い人が、成長して、髪を結うほどである。またその側に、三歳ほどである幼い人がいらっしゃったのを、少将は、「あれはどういうことだ（＝あの子は誰だ）」とおっしゃると、六条は、「この（幼い）方こそ」とだけ申し上げて、袖を顔に押し当てて涙を流したので、「それでは（鬼界ヶ島に）下った時、（北の方が懐妊して苦しみ）かわいそうな有様を置き去りにし（て旅だっ）たが、無事に育ったことよ」と、（その時のことを）思い出しても悲しかった。少将はもとの通り後白河院に召し使われて、宰相中将に昇進なさる。

康頼入道は、東山双林寺に、自身の山荘があったので、そこに落ち着いて、まず感慨を歌に詠んだ。

昔なじみの家の軒の板の隙間に（そこは、さぞ朽ちてまばらになっているだろうと思っていたのに）、苔が生えて、思ったほどには漏れない月（の光）だなあ。

そのままそこに引き籠もって、つらかった昔のことを思い続け、『宝物集』という物語を書いたと言われた。

【設問解説】

問1　短語句の解釈の問題

センター試験の古文の**問1**では、短語句の解釈が三つ出題される形式がほぼ定着している。短語句の解釈についての設問は、センター試験だけでなく、

多くの大学入試問題にみられるが、センター試験では特に、古語の意味や文法・語法に基づいた正確な解釈が求められる。

(ア)「とこそおはせしか」

「と／こそ／おはせ／しか」と品詞分解される。

「と」は副詞、「こそ」は強意の係助詞、「おはせ」は、サ行変格活用の敬語動詞「おはす」の未然形、「しか」は過去の助動詞「き」の已然形である。

> と（副詞）
> 1　そのように。あのように。
> ※　副詞「かく（＝このように）」と対で用いられることが多い。

「と」の直上は読点「、」であるが、文脈から考えて、この「と」が、直前の「ここには大納言殿の」を受ける引用の用法である格助詞とは考えにくく、指示の副詞であるとわかる。すると、「そのように」となっているのは③しかなく、正解はすぐに決まる。しかし、「と」の意味がわからなかったとしても、他の語の意味から選択肢を絞ることが可能である。

> おはす（サ行変格活用動詞）
> 1　いらっしゃる。おありになる。
> ※　「あり」「行く」「来」の尊敬語。
> 2　～ていらっしゃる。
> ※　尊敬の補助動詞。

選択肢①と④は尊敬の表現が訳出されておらず、⑤の「おっしゃって」は「言ふ」の尊敬の訳語であり、不適切である。「あり」には「過ごす」の意もあるため、「おはす」の訳出により、選択肢は②か③に絞られる。また、「しか」は過去の助動詞「き」の已然形で、係助詞「こそ」の結びとなっている（過去の助動詞「き」は連用形接続であるが、カ行変格活用・サ行変格活用の動詞の場合は未然形に接続することもあり、ここではその形である）。「こそ」は強意の係助詞であって、その結びは已然形であるから、「しか」が「し」（過去の助動詞の連体形）＋「か」（疑問の助詞）のように分解されることはなく、「こそおはせしか」が「いらっしゃったのか」という疑問の意になることはない。よって、正解は③だと決めることができる。

ここは、少将が、父大納言を思い出す部分であり、「と」は後の「かう（＝かく）」と呼応し、「ここには大納言殿の、とこそおはせしか。この妻戸をば、かうこそ出で入り給ひしか（＝ここには大納言殿が、そのようにお過ごしになっていた。この妻戸を、このように出入りなさった）」と、生前の父の姿を回想しているのである。

(イ)「さてもあるべきならねば」

「さて／も／ある／べき／なら／ね／ば」と品詞分解される。

「さて」は副詞、「も」は係助詞、「ある」はラ行変格活用動詞「あり」の連体形、「べき」は推量（可能・適当）の助動詞「べし」の連体形、「なら」は断定の助動詞「なり」の未然形、「ね」は打消の助動詞「ず」の已然形、「ば」は接続助詞である。「さてもあるべきならず」で慣用句として覚えておくとよい。

> さてもあるべきならず（連語）
> 1　そのままにしているわけにもいかない。そのままであってよいことではない。
> ※　「さてあるべし」「さてありぬべし」を否定した形である。

慣用句としての意味を知っていれば、すぐに④が正解だとわかるのであるが、それ以外にも選択肢を絞るポイントがある。

> ば（接続助詞）
> 1　未然形＋ば＝～ならば。
> ※　順接仮定条件を表す。
> 2　已然形＋ば＝～ので。～と。～ところ。
> ※　順接確定条件を表す。

この「ば」は、打消の助動詞「ず」の已然形の「ね」に接続しているので、順接確定条件である。仮定の訳出である「なら」となっている⑤や、逆接の訳出である「けれど」「のに」となっている①と③は不適切となる。「ので」となっている②と④だけを吟味すればよいことになるが、慣用句の中の「さて」に「すぐに」の意はないので、④が正解だとわかる。

ここは段落が変わっているところであるが、直前の段落の終わりには「家路はさらに急がれず」とあり、また、傍線部の後には「泣く泣く洲浜殿を出でつつ」とある。洲浜殿からの家路を急ぐ気になれない少将であるが、「さてもあるべきならねば」泣きながら洲浜殿を出る、という展開だから、②の「すぐに家路につく気にはなれそうもないので」では意味をなさず、内容からも正解は④だと確認できる。

(ウ)「おとなしうなつて」

「おとなしう／なつ／て」と品詞分解される。

「おとなしう」はシク活用形容詞「おとなし」の連用形「おとなしく」がウ音便化したもの、「なつ」

はラ行四段活用動詞「なる」の連用形「なり」が促音便化したもの、「て」は接続助詞である。

おとなし（シク活用形容詞）
1　おとなになっている。大人びて落ち着いている。
2　思慮分別に富む。
3　年配だ。主だっている。
4　穏やかだ。穏和だ。

①の「成長して」、④の「思慮深くなって」、⑤の「落ち着いて」は、語意として適切な訳出である。複数の選択肢が成り立つ場合には、本文に戻って、傍線部の前後を確認するとよい。「流され給ひし時、三歳にて別れし幼き人、おとなしうなつて、髪結ふ程なり」とあり、別れた時に三歳ぐらいだった子が、「髪結ふ程」になっているように見えたということだが、「髪結ふ」とは、子どもの髪型を改めて髪を結い、冠や烏帽子（えぼし）をかぶる元服（＝成人式）のことである。その年齢は特に定まってはいなかったようであるが、「幼き人」が「髪結ふ程」になったということは、まさに「成長した」ということだと考えられるし、この子が思慮深かったり落ち着いているという様子は本文中に特に描かれていないので、①が正解となる。

問2　文法問題

センター試験の古文の**問2**では、助動詞を中心とした文法問題が出題されることが多いが、敬語が問われることもある。今回は「に」「ぬ」「れ」の識別について、助動詞に限定して問うてみた。

a　「経（ふ）にければ」

助動詞「に」には、次の二つがある。

助動詞「に」の識別
1　完了の助動詞「ぬ」の連用形。
　「き」
　「けり」
　「たり」
　「けむ」
連用形＋「に」＋
※　四つの助動詞のうちのいずれかを伴う。
2　断定の助動詞「なり」の連用形。
連体形・非活用語＋「に」＋「あり」
※　「に＋あり」を「である」と訳出できる。
※　「あり」以外に、「おはす」「侍り」「候ふ」など、「あり」の敬語がくることもある。

ここは、直下に過去の助動詞「けり」があるので、完了の助動詞だとわかる。直上の「経（へ）」はハ行下二段活用動詞「経（ふ）」の連用形だと考えて、矛盾がない。

b　「忘れぬ花」

助動詞「ぬ」には、次の二つがある。

助動詞「ぬ」の識別
1　打消の助動詞「ず」の連体形。
※　未然形に接続する。
2　完了の助動詞「ぬ」の終止形。
※　連用形に接続する。

ラ行下二段活用動詞「忘る」は、未然形と連用形が同じ「忘れ」となるので、接続では見分けられない。そこで活用形を考えると、「花」という名詞（体言）の直上にあることから、「ぬ」が連体形であるとわかる。よってこの「ぬ」は、打消の助動詞である。

c　「院に召し使はれて」

選択肢を見ると、この「れ」は、自発・受身・可能・尊敬の助動詞「る」であることがわかる。助動詞「れ」には、他に、完了・存続の助動詞「り」の已然形か命令形の可能性もあるが、今回は選択肢にある「尊敬」「自発」「受身」の中の、どの意味であるのかを見極めよう。

助動詞「る」の文法的意味
1　自発…「思ふ・驚く・泣く・嘆く」のような心情を表す動詞に接続していることが多い。
2　受身…「誰に～される」のかという「受身の対象」が本文中に書かれているか、読み取れる場合。
3　可能…平安時代までは、多く打消・反語を伴う。
4　尊敬…主語の身分が高い場合に用いられるが、尊敬表現の中では敬意は比較的軽い。

ここは、「院に」という受身の対象が示されていることから、受身であるとわかる。よって正解は⑤。

問3　心情の説明問題

傍線部の心情を問う設問では、まず傍線部を解釈してから、そこに読み取れる心情を確認する。その上で、他にその心情を説明している箇所がないか、傍線部の前後を中心に、本文を読み直してみよう。

まず、傍線部**X**「なほ行きもやらざりけり」を逐

語訳しよう。

なほ（副詞）
1　それでもやはり。依然として。
2　さらに。いっそう。
3　なんといっても。

～やる（ラ行四段活用動詞）
1　はるかに～する。
※　その動作が時間的・空間的に遠く離れた所にまで及ぶ意を添える。
2　すっかり～する。
※　その動作が完全に行われる意を添える。「～やらず」の形で、し終えることができないことを表す場合が多い。

「なほ」は、文脈から1の意で、「やる」は2の意でとるのがよく、全体では「それでもやはりすっかり行くこともできなかった」となるが、では「それでもやはり」とはどういうことなのか、傍線部の前を確認すると、

康頼入道が迎へにも、乗物ありけれども、それには乗らで、今さら名残の惜しきにとて、少将の車の尻に乗つて、七条河原までは行く。それより行き別れけるに（＝康頼入道の迎えにも、乗物が来ていたけれど、それには乗らないで、今改めて名残が惜しいのでと、少将の車の後ろに乗って、七条河原までは行く。そこから別れたが）

とある。康頼入道は、自分の乗物もあったのに、名残惜しくて少将の牛車に乗っていた。そしてそこから降りて別れたものの、「なほ（＝それでもやはり）」なのだから、まだ康頼入道としては「名残が惜しく」て、その場を離れることができないでいるのである。

次に、傍線部の後ろを見ると、漢文訓読体の文章の中に「別るる余波も惜しきぞかし」という表現があることに気付く。この辺りも、少将との名残を惜しんでその場にいる康頼入道の心情を説明している。内容を確認すると、

花の下の半日の客、月前の一夜の友、旅人が一村雨の過ぎ行くに、一樹の陰に立ち寄つて、別るる余波も惜しきぞかし。況やこれは、憂かりし島の住まひ、船の中浪の上、一業所感の身なれば、先世の芳縁も、浅からずや思ひ知られけん。（＝花の下の半日の客、月の前の一夜の友、旅人がにわか雨の過ぎゆく時に、一本の木の陰に立ち寄って、別れる名残も惜しいことだよ。ましてこの場合は、つらかった島での暮らし、船の中波の上、一業所感の身であるので、前世の縁も、つい深く思い知られたのであろうか。）

というものである。「半日」「一夜」「一村雨の過ぎ行く」といった、ほんの短い時間をともに過ごした人とでも、別れるときは名残惜しいのに、ともに鬼界ヶ島に流され、島での生活を共にした少将とは前世の縁までも感じられ、だからこそ、その人との別れは本当につらく、名残が尽きないというのである。

以上の内容が書かれている選択肢は②で、これが正解である。

①は、「自分の牛車はもう帰ってしまっていた」とあるが、ここは本文からははっきりとはわからない。このあと康頼入道が東山に行くことから、おそらく康頼入道の乗物は、彼を乗せないまま少将の車の後をついてきていたと考えられるが、仮に乗物が帰ってしまっていたとしても、そのことで康頼入道が、「途方に暮れている」わけではなく、ここが誤りである。

③は、「少将と離れるのは心細く」は正しいが、「もし自分たちが再び何らかの政争に巻き込まれてしまったらどうすればよいのかと、なおも漠然とした不安を感じている」などとは、本文のどこにも書かれておらず、不適切である。

④は、本文にある「一業所感の身なれば、～浅からずや思ひ知られけん」は、「こうやっていつかは別れていくことが宿命なのだ」という意味ではなく、また、「何とか今の別れを受け入れようとしている」というのも誤りである。

⑤は、康頼入道は確かに出家者であるが、「かねてからの自分の希望であった仏道修行にいよいよ専念できると思うと、その寂しさも少しは慰められる気がしている」に該当する描写は本文にはなく、不適切である。

問4　内容の説明問題

傍線部の内容を問う設問では、まず傍線部を正確に逐語訳し、それだけではわかりにくい事柄について、主体や客体、指示語や省略されている事柄を補って考えてみる。傍線部の前後にそのヒントがあることが多い。今回は、「六条のどのような様子か」と問われていたが、まず傍線部**Y**「『これこそ』とばかり申して、袖を顔におしあてて涙を流しける」を訳していこう。その際に、「これ」という指示代名詞が何を指しているのかを明らかにしなければならない。

そこで傍線部の前を見ると、

「またそのそばに、三つばかりなる幼き人のおはしけるを、少将、『あれはいかに』とのたまへば」

とある。少将の言う「あれ」は、六条の言う「これ」と同じであり、「三つばかりなる幼き人」を指している。よって傍線部の訳は、

> 「この（幼い）方こそ」とだけ申し上げて、袖を顔に押し当てて涙を流した

となる。では、この三歳ぐらいの幼い子が、どうだというのであろうか。「これこそ」という六条の発言は、係助詞「こそ」の結びがなく、述部が省略された形になっている。そこで、傍線部の後ろを見てみると、

「さては下りし時、心苦しげなる有様を見おきしが、事ゆゑなく育ちけるよ」

とある。これは、六条の様子を見た少将の思いである。「下りし時」とは、「少将が鬼界ヶ島に下った時」の意。いよいよ都を追われる時、少将は「心苦しげなる（＝かわいそうな）有様」を置き去りにして旅立ち、そして何かが「事ゆゑなく育ちける（＝無事に育った）」という内容であるが、この「心苦しげなる有様」とは、当時、北の方が懐妊して苦しみ、はたから見てもかわいそうだった様子を指すと考えられる。少将が、家族と再会した際、三歳ぐらいの幼い子がいることについて「あれはいかに」と言ったのは、この子には見覚えがなかったからであり、つまり、少将が都を追われる時には、まだこの子は北の方の腹の中にいたのである。そしてその子が無事に生まれ、ここまで育ち、今、戻って来た少将の目の前にいるのだ。六条は、そのことについて少将に語ろうとしたのだが、さまざまな思いもあったのだろう、「これこそ」と言ったところで涙に咽（むせ）んでしまい、それ以上話すことができなくなったのである。この内容を踏まえた選択肢④が正解となる。

①は、「これこそ」の内容については正しいが、六条が泣いた理由が違っている。ここでの六条の涙は、少将を「目にし」たからではないし、また、「やつれはてた少将の姿」は本文中に描かれていない。「いつしかやせ衰へて」とあるのは北の方の様子である。

②は、「当時三歳だった若君をここまで何とか育てた」が誤り。「幼き人」という表現は、二人の子に用いられているが、当時三歳だった「幼き人」は「おとなしうなつて」（**問1(ウ)**の解説参照）であり、そのそばにもう一人、今現在「三つばかりなる幼き人」がいて、六条が語ろうとしたのは、今三歳ほどの「幼き人」についてである。

③は、「少将の幼い子どもたちを院が気にかけてくれていた」という内容は本文にはなく、よって六条の涙が「院の恩愛の深さを思い知」ってのものとはいえず、不適切である。

⑤は、「生まれたばかりの子との別れを惜しんでいた気の毒な様子を思い出し」が誤り。傍線部の後ろにある「思ひ出でてもかなしかりけり」の主体は少将であって、六条ではない。また、先に述べたように、「心苦しげなる有様」は、北の方の様子であって、少将が、「生まれたばかりの子との別れを惜し」むものではない。

問5　和歌の説明問題

センター試験の古文では、和歌に関する設問は頻出である。和歌の解釈やそこに込められた心情、和歌修辞などが問われる。また、詠み手が問われることもある。今回は、「**A**・**B**の和歌に関する説明」を問うた。

Aの和歌についての選択肢は①と②である。（注5）にある通り、この歌は『後拾遺和歌集』に収められている、出羽弁が詠んだものである。その古歌に託して、少将が自らの思いを表出したということについては、選択肢①と②は共通している。そこで、**A**の和歌を解釈することによって、少将の思いをとらえよう。

まず**A**の和歌を「五／七／五／七／七」に分け、逐語訳していくが、和歌の訳を考える場合には、必ず句切れの確認をしなくてはならない。最終句を除く各句の末に終止形・命令形・係り結びの結びの語・終助詞などがある場合には、そこで句切れとみなし、いったん文を終止させて訳出する。この**A**の和歌には句切れは存在していないので、初句から一文として訳していくとよい。「ふるさと」は「旧都・昔なじみの地・生まれた土地・故郷」などの意を持つ名詞だが、この時少将は、洲浜殿の花を見て古歌を口にしているのだから、「ふるさと」とは、この洲浜殿のことを指し、語の意味としては「昔なじみの地」がふさわしい。

> ふるさとの／花のもの言ふ／世なり**せば**／
> もし昔なじみの地の　花がものを言う　世の中であっ**たならば**
>
> いかに昔の　／事を問は**まし**
> どんなにか昔の　ことを尋ね**ただろうに**

三句目の「せば」は過去の助動詞「き」の未然形

に接続助詞「ば」がついたもので、五句目末の「まし」と呼応して反実仮想（＝もし～だったならば、…だっただろうに）の意を表す。反実仮想とは、現実とは反対の事柄を想像することで、現実は、訳出される内容の反対である。よって、**A**の和歌における現実の事柄は、

> 昔なじみの地の花がものを言う世の中ではないので、昔のことを尋ねることはできない

ということになろう。洲浜殿に咲く花々は、亡き父の昔の姿を見ていただろうに、花はものを言わないので、尋ねることができないと、少将は嘆いているのである。

①は、「花は何も言わないので、一人静かに父の思い出に浸ることができるという落ち着いた気持ち」と、花がものを言わないことを肯定的にとらえているので、少将の心情を適切に表してはいない。

②は、「この美しい花が、父のいるあの世にまで散っていって父に昔の思い出を語り、その魂を慰めてくれたらよいのに」と、花が語る相手をあの世にいる父大納言だとしているところが誤りである。

Bの和歌についての選択肢は③・④・⑤であるが、そのすべてが、康頼入道の詠んだものだという点で共通している。そこで、**B**の和歌を訳し、康頼入道の心情をとらえていく。**B**の和歌にも句切れは存在していない。

> ふるさとの／軒の板間に　／苔むして／
> 昔なじみの家の　軒の板の隙間に　苔が生えて
>
> 思ひしほどは／漏らぬ月かな
> 思ったほどには　漏れない月（の光）だなあ

ここでの「ふるさと」も、**A**の和歌同様に「昔なじみの地」の意であり、今、康頼入道が腰を落ち着けた、東山双林寺の康頼入道自身の山荘を指す。その家の軒の、板と板との間に隙間があるのだが、その隙間から月光が漏れて射し込んでくるかと思っていたのに、板間に苔が生えて隙間をふさいでいるため、思ったほどには月の光が漏れてこない、という内容である。

ここで気づいてほしいのは、康頼入道が少将とともに洲浜殿で夜が更けるまで時を過ごした場面にあった、「荒れたる宿のならひとて、古き軒の板間より、漏る月影ぞくまもなき」という記述である。「荒れたる宿」は（注6）にあるように、「君なくて荒れたる宿の板間より月の漏るにも袖は濡れけり（＝あなたがいなくて荒れてしまった宿の板間から月が漏れてくるのを見るにつけても、涙で袖は濡れたことだよ）」という和歌を踏まえている。洲浜殿では、古い軒の朽ちた板間から月光が冴え冴えと漏れ射し込んでいたのであるが、「君なくて」の和歌でも詠まれたように、その情景は、「荒れたる宿のならひ（＝荒れた家屋の常）」であるという。だからこそ康頼入道は、自分の山荘も荒れているだろうから、さぞかし軒の板間が朽ちてそこから月の光が漏れ入って来ることだろうと思っていたのだが、実際は、朽ちた軒の板が苔むして、その苔が隙間を埋めてしまっており、思ったほどには月の光が漏れてこなかった。すなわちそれは、康頼入道の想像以上にこの山荘が荒れ果ててしまったことを意味しており、その状況を適切に説明するのは、選択肢③である。よって、これが正解。

④は、山荘が苔むしてしまったことについて「無事に都に戻って来られたことを思えばそれはたいしたことではなく」とあるが、そのような内容は、和歌のどこからも読み取れず不適切である。また、この和歌で「漏らぬ」と詠まれているのは月光のことであり、「涙」ではない。

⑤は、「洲浜殿に比べれば、自分の山荘は月の光が漏れて」こないし、「苔までも生えていた」という状況は正しいが、そのことに対する理解が誤っている。それは「荒れ果てているわけでもなく」「風流を楽しむ住まい」なのではない。山荘は、洲浜殿に比べてよりいっそう荒れていたのであり、また「風流を楽しむ」といった内容も、和歌のどこからも読み取れない。

問6　文章の表現と内容についての説明問題

センター試験の古文では、近年、表現に関する問いが出題されている。傍線が引かれているわけではなく、本文全体を視野に入れて解答しなければならないので容易ではないが、選択肢を手がかりにして間違いを指摘していく過程で、表現の特徴に気付いたり、より深い内容の読解に到達することができる設問となっている。

選択肢を一つ一つ吟味していこう。

①は、本文の冒頭部分に該当する。確かに洲浜殿の様子が、外から内へと描写されており、それは少将の歩みにしたがっているのであろうが、少将の目に映る洲浜殿は荒れ果てており、それにつけても「興ぜし人の恋しさに、尽きせぬ物は涙なり」「父の事を恋しげにこそのたまひけれ」とあるように亡き父大納言のことが思い出されて恋しい、というのであって、そこに「ようやく都に戻って来ることがで

きたという少将の喜びが徐々に高まっていく様子」を読み取ることはできない。

②が正解である。「洲浜殿で亡き父大納言を恋い慕い、涙を流す少将の様子」は第一段落に、「再会した家族の姿」は第三段落に描かれている。ようやく鳥羽まで戻ってきても、少将は亡き父を思って涙を流し、また、少将の母上が「命あれば」とだけ言って「引き被いてぞ臥し給ふ」のは、（注11）を参照すると、息子の少将に再会できた喜びはあるが、夫である大納言に二度と会うことができない悲しみが深かったからだということがわかる。だからこそ、息子に会えたにもかかわらず、衣をかぶり泣き臥せってしまうのである。また、「いつしかやせ衰へて」は北の方の様子である。「さしもはなやかにうつくしうおはせしか」人が、すっかりやせ衰えて別人のようになってしまっていた。帰京し、家族との再会の喜びを描くこの文章に、そのような表現があるというのは、「少将の一家に起こった苦難」が、いかに彼らの人生に暗い影を落としたかということを示している。

③は、文体についての言及である。たしかに第一、二段落では、引用部以外にも「人跡絶えて」「月前の一夜の友」などの漢文訓読体は用いられているが、人々との再会を描く第三段落においては用いられていない。「みな悦泣ども しけり」は漢文訓読体とはいえない。また、『平家物語』は軍記物語であり、漢文訓読体は合戦の場面などで用いられ、「力強さと生き生きとした躍動感」を生み出すことも多いが、この場面ではそのような力強さや躍動感は感じられない。

④は、少将が和歌を口ずさむのを聞いて「折節あはれに覚え」たのは康頼入道であるが、「さこそはあはれにもうれしうもありけめ」の主語は、「都へ帰り入られけん心の中ども」と複数を表す接尾語「ども」が付いていることから少将と康頼入道の二人であり、また、「さこそはあはれにもうれしうもありけめ」と過去推量の助動詞「けむ」が用いられていることから、この部分は語り手の感想であると考えられるため、「経緯が」「一貫して康頼入道の視点から述べられ」というのが誤りである。また、本文の最後に、康頼入道が『宝物集』を書いたとは記されているが、「『宝物集』の内容をもとにして描かれたものであることが明らかにされている」わけではない。

⑤は、少将の行動には尊敬語が用いられているが、康頼入道の行動には敬語が一切用いられていないという指摘については正しいと考えられる。本文11～12行目の「都へ帰り入られけん心の中ども」の尊敬の助動詞「れ」については、④の説明でも述べたように、複数を表す接尾語「ども」がついていることから、その主語は少将と康頼入道の二人であり、そのため、「れ」の敬意が康頼入道にも向けられているようにも思われるが、本文の他の部分では康頼入道の行動にまったく敬語が用いられていないことを考慮すると、この敬意は、少将に向けられたものだと考えるのが自然であろう。仮に、この「れ」が康頼入道への敬意を含むとすれば、「敬語が一切用いられておらず」の部分も間違いとなるが、この選択肢の大きな間違いは、後半部である。康頼入道に敬語が用いられないのは、身分の差による語り手からの待遇を示すものであり、それによって「康頼入道が、常に少将に遠慮する気持ちを持っていたことがうかがわれる」ということはない。

第4問　漢文

【出典】

『続資治通鑑長編』全五百二十巻。南宋・李燾の撰。北宋一代の歴史を年月順に記した編年体の歴史書。北宋の司馬光の編纂した『資治通鑑』（春秋時代から五代までの一三六二年間を編年体で記述した歴史書）に続く、『続資治通鑑』を編纂するために材料となる史料を集めたものである。もと九百八十巻であったが、元の時代に散逸した。現在伝わる五百二十巻本は、清の学者が『永楽大典』などの書物を元に復元したものである。本文は巻五十八、真宗景徳元年（一〇〇四年）十二月丁亥（八日）の条によった。

【本文解説】

北宋王朝が成立すると、北方の異民族である契丹との間で国境紛争が何度も起こった。本文は、北宋時代、契丹との外交に当たった曹利用という人物についての話である。

景徳元年（一〇〇四年）、契丹が宋に侵入すると、真宗は宰相の寇準の進言に従って親征し、両軍は澶州（現在の河南省濮陽県）で対峙した。本格的な戦争に突入することを避けたいと考えていた真宗は、和平を結ぶための使者として曹利用を契丹に派遣することにした。その際、和平の条件として宋から契丹に毎年贈る銀と絹をいくらにすべきかが焦点となった。曹利用が交渉に赴くに当たって、皇帝は和平を結ぶためなら百万の銀と絹を贈ることになってもやむを得ないと述べ、契丹に対して大幅に譲歩することを認める意向を示した。ところが寇準は、必ず三十万以内に収めるよう指示し、三十万を超えたら戻って来てはならないと厳しく戒めた。

曹利用は、交渉によって銀と絹の総額を三十万に取り決めて帰国した。交渉の結果を報告しようとした時、皇帝はひとまず側近の宦官をやって曹利用の報告を受けさせようとした。しかし曹利用は、機密事項であるという理由で、皇帝にお目にかかって直接報告させて欲しいと主張した。皇帝が交渉結果のあらましだけでも宦官に報告するよう促したところ、曹利用は三本の指を頬に当てるしぐさをした。宦官は、これを三百万と思い込み、そのまま皇帝に伝えた。皇帝は額の大きさに愕然としつつも、和平を結ぶためなら仕方がないと容認する考えを示した。ところがこの時、以上の皇帝と宦官のやりとりがすっかり曹利用に聞こえてしまった。皇帝が総額を三百万だと誤解しているのを知った曹利用は、皇帝にお目通りするに当たって、わざと総額が大きすぎることを謝罪したうえで、実は三十万であることを明かすことによって皇帝を喜ばせ、多額のほうびをもらった。曹利用は、皇帝の称賛を得ることを願い、皇帝の誤解を利用することによって、皇帝の喜びを一層大きなものにしようとしたのである。彼の策はまんまと成功し、その結果皇帝から多額のほうびを引き出すことに成功したのである。

【書き下し文】

利用の再び契丹に使ひするや、面して歳に金帛を賂ふの数を請ふ。上曰はく、「必ず已むを得ざれば、百万と雖も亦た可なり」と。利用辞去するに、寇準召して幄次に至らしめ、之に語げて曰はく、「敕旨有りと雖も、汝往くに、許す所は三十万を過ぐるを得ず。三十万を過ぐれば、来りて準に見ゆる勿かれ。準将に汝を斬らんとす」と。利用果して三十万を以て約を成して還る。入りて行宮に見ゆるに、上方に食を進め、未だ即ちには対せず、内侍をして賂ふ所を問はしむ。利用曰はく、「此れ機事なれば、当に面奏すべし」と。上復た之に問はしめて曰はく、「姑く其の略を言へ」と。利用終に肯へて言はずして、三指を以て頬に加ふ。内侍入りて曰はく、「三指頰に加ふ。豈に三百万に非ずや」と。上声を失ひて曰はく、「太だ多し」と。既にして曰はく、「姑く事を了ふれば、亦た可なるのみ」と。宮帷浅迫にして、利用具に其の語を聞く。対するに及んで、上亟かに之に問ふ。利用再三罪を称し、曰はく、「臣許すの銀絹多きに過ぐ」と。上曰はく、「幾何ぞ」と。曰はく、「三十万なり」と。上覚えず喜ぶこと甚だし。故に利用賞せらること特に厚し。

【全文解釈】

曹利用が再び契丹に使者として赴く時、（皇帝に）謁見し、和平の条件として宋が契丹に毎年贈る銀と絹の総額について（の意向を）尋ねた。皇帝は言った、「（和平を結ぶために）どうしてもやむを得ないのであれば、（総額は）百万であってもよろしい」と。利用が（皇帝に）挨拶して去ろうとすると、寇準が（利用を）仮の宿舎まで呼び出し、彼に告げて言った、「陛下のご意向はあるが、そなたが（契丹に）赴くに当たって、（契丹に贈る銀と絹の総額は）三十万を超えてはならない。三十万を超えたならば、私に顔を見せに来てはならない。（顔を見せに来たら）私はそなたを斬るであろう」と。利用は、言われた通り三十万という条件で和平を結んで帰国した。仮の宮殿に入り謁見しようとすると、皇帝はちょうど食事をしていたところで、すぐには利用の謁見を受けず、宦官に（契丹に贈る銀と絹の）総額を尋ねさせた。利用は言った、「これは秘密の事柄なので、陛下にお目通りしてご報告しなければなりません」と。皇帝がもう一度（宦官

に命じて）利用に尋ねさせて言った、「とりあえずあらましを述べよ」と。利用は最後まで話そうとせず、三本の指を頬に当てた。宦官は（宮殿に）入って皇帝に申し上げた、「三本の指を頬に当てました。なんと三百万ではありませんか」と。皇帝は思わず声をあげ、「（額が）多すぎる」と言った。やがてこう言った、「とりあえず契丹と和平を結ぶことができたならば、それでもかまわないのだ」と。宮殿の垂れ幕が薄かったので、利用はすっかりその会話を聞いてしまった。皇帝に対面すると、皇帝はすぐに利用に（総額を）尋ねた。利用は繰り返し謝罪しながら言った、「私が（契丹と）約束した金品はあまりに多額です」と。皇帝が言った、「どれほどなのか」と。（利用は）言った、「三十万です」と。皇帝は思わず大喜びした。こういうわけで利用は大変手厚いほうびを与えられたのである。

【重要語・基本句形】

Ⅰ　重要語

○不レ得レ已（ずエムヤヲ）＝やむを得ない・仕方がない
○雖二――一（いへどモト）＝①たとえ――であっても（逆接の仮定条件）
②――であるけれども（逆接の確定条件）
○亦（マタ）＝も同様に・やはり
○可（カナリ）＝よろしい・かまわない
○辞去（じきよス）＝挨拶して去る
○汝（なんぢ）＝おまえ
（＝若・爾・女）
○所二――一（ところ）＝――すること・もの
○見（まみユ）＝お目にかかる
○果（はたシテ）＝思ったとおり・やはり
○方（まさニ）＝ちょうどその時
○復（マタ）＝再び・もう一度
○姑（しばらク）＝とりあえず・しばらく
○終（つひニ）＝結局・とうとう
○既（すでニシテ）而（ツカさニ）＝やがて・間もなく
○具（しん）＝くわしく・十分に
○臣＝（君主に対する）臣下や民の一人称
○甚（はなはダシ）＝ひどい
○故（ゆゑニ）＝だから

Ⅱ　基本句形

○勿（なカレ）二――一＝――してはいけない（否定形）
○将（まさニ）――（スント）＝いまにも――しようとする・――するつもりだ（再読文字）
○未（いまダ）二――一＝まだ――しない（再読文字）
○使（しムヲシテ）二A――一＝Aに――させる（使役形）
（＝令）
○当（まさニ）二――一（ベシ）＝当然――すべきだ・きっと――するにちがいない（再読文字）
○不（ずンバ）二肯（あへテ）――一＝――することを承知しない（否定形）
○豈（あニあらズ）非二――一乎（ニやト）＝――なんと――ではないか（詠嘆形）
○――耳（のみ）＝――だけだ・――のだ（限定形）
○幾何（いくばクソ）＝どれほどか（疑問形）
○被（らル）二――一＝――される（受身形）

【設問解説】

問1　語句の意味の問題

(1)「機事」の「機」は名詞として(ア)「装置・しかけ」、(イ)「はたおり機」、(ウ)「物事が変化するきっかけ」、(エ)「政務」などの意味、形容詞として(オ)「秘密の」、(カ)「危険な」などの意味がある。どの意味が当てはまるかは文脈から判断しなければならない。曹利用が契丹との和平交渉の結果を報告に来た時、皇帝は食事中であったため、ひとまず宦官を使いにやり、契丹との間で取り決めた銀と絹の総額を尋ねさせた。これに対し曹利用は、銀と絹の総額が「機事」であることを理由に、「陛下にお目通りしてご報告しなければなりません」（「此機事、当二面奏一」）と答え、宦官に話すのを断り皇帝に直接報告しようとしたのである。この内容を踏まえて考えると、曹利用は銀と絹の総額が機密に属する事柄であると述べていることがわかる。したがって「機」は(オ)の意味で、③「秘密の事柄」が正解。

①「緊急な事柄」・④「喜ばしい事柄」・⑤「個人的な事柄」は、皇帝に直接報告しようとする理由として当てはまらないわけではないが、「機」にはこれらの意味はない。②「些細な事柄」は皇帝に直接報告を求める理由としては当てはまらない。

(2)「既二而一」は「やがて・間もなく」という意味の副詞で、正解は④である。なお、「既」一文字の場合は「もうすでに」の意味で「すでに」と読むが、接続の助字「而」をともなうと、送り仮名「して」を加えて「すでにして」と読む。

問2　内容説明の問題

寇準の言う「敕旨（ちよくし）」（皇帝の意向）とは、具体的には皇帝が曹利用に対して述べた「必不レ得レ已（ムヲズンバレバ）、雖二百万一亦可（トタナリ）」という発言を指している。したがってこの発言を正確に解釈する必要がある。

まず語句を確認しよう。「不レ得レ已」は「やむをえず」と読んで「やむを得ない・仕方がない」という意味。「雖二――一」は「――といへども」と読んで「たとえ――であっても（逆接の仮定条件）・――であるけれども（逆接の確定条件）」という意味。「亦」は「また」と読んで「も同様に・やはり」という意味。「可」は「かなり」と読んで「よろしい・かまわない」と同意したり許可を与える意味。

次に文脈を確かめよう。皇帝のこの発言は、「利用之再使二契丹一也、面請レ歳賂二金帛一之数上」（曹利用が再び契丹に使者として赴く時、皇帝に謁見し、和平の条件として宋が契丹に毎年贈る銀と絹の総額についての意向を尋ねた）とあるように、曹利用が皇帝の意向を尋ねた時の返答で、宋が契丹に毎年贈る銀と絹の総額をどれくらいに決めるべきかについての意向を述べたのである。「雖二百万一」は、皇帝が「百万であっても」と仮定として述べたものである。以上の点を踏まえて解釈すると、「和平を結ぶためにどうしてもやむを得ないのであれば、（宋が契丹に毎年贈る銀と絹の総額は）百万であってもよろしい」となる。これと同じ内容を述べる①が正解である。

②は「毎年贈る銀と絹の総額は百万以内に抑えるべきだ」が誤り。③・④は総額を「三十万以内」としている点が誤り。⑤は総額を「百万」とすることを許可していない点が誤り。

問3　書き下し文と解釈の問題

(i)　書き下し文の問題

まず、前後の文脈を踏まえて傍線部の意味を考えよう。直前に「汝往、所レ許不レ得レ過二三十万一」（そなたが契丹に赴くに当たって、契丹に贈る銀と絹の総額は三十万を超えてはならない）とあるように、寇準は曹利用に対して、和平の条件として契丹に贈る銀と絹の総額を三十万以内に抑えるよう命じている。また、直後には傍線部を受けて「準将レ斬レ汝」（私はそなたを斬るであろう）と述べている。これらの内容を踏まえて傍線部の意味を推測すると、「（銀と絹の総額が）三十万を超えたら、私の元に戻って来てはならない。（戻って来たら命はないものと思え）」と、三十万以内に抑えさせるために曹利用を脅すかのような言葉をかけていることがわかる。

この解釈に沿って書き下すと、「過二三十万一」は順接の仮定条件で「三十万を過ぐれば」と読む。①・②の読みが正しい。③・④は「三十万を過ぐるも」と逆接に読んでいるのが誤り。⑤は「三十万を過ぎて」と単純接続である点が誤り。後半の「勿二来見一準」は「――してはならない」という禁止の意味で「勿」を「――勿かれ」と読む。①・③「勿からんや」の反語の読みは誤り。正解は②。

(ii)　解釈の問題

(i)で検討した正しい書き下し文「三十万を過ぐれば、来りて準に見ゆる勿かれ」を訳すと、「（契丹に贈る銀と絹の総額が）三十万を超えたならば、私に会いに来てはならない」となる。この訳に合致する①が正解である。

②は「総額が三十万を超えたとしても」と逆接の仮定条件にしており、また「見」を「報告する」の意味に取り、「勿」を「――なさい」と解釈している点が誤り。③は「見」を「報告する」の意味に取っているのが誤り。④は「勿」を「――ないだろう」と解釈しているのが誤り。⑤は「総額が三十万を超えたとしても」と逆接の仮定条件にしており、また「勿」を「――なければならない」と解釈しているのが誤り。

問4　返り点と書き下し文の問題

まず、使役形「使二A――一」（Aに――させる）に着目する。直前に「入見二行宮一、上方進レ食、未二即対一」（曹利用が仮の宮殿に入り謁見しようとすると、皇帝はちょうど食事をしていたところで、すぐには利用の謁見を受けず）とあることから、傍線部は皇帝（「上」）が宦官（「内侍」）に命じて応対させたことを言っているとわかる。使役形の読み方に従って「内侍をして――しむ」と読んでいるのは③・④である。

次に、皇帝が宦官に行わせた内容を考え、全体の読みを確定しよう。「所」は「所二動詞一」の形で動詞を名詞化して「動詞すること・もの」などと訳し、文脈に応じて動作の対象や内容・場所などを表す。「所賂」では、「所レ賂」と返り点を施して「賂ふ所」と読む。「賂」は「金品を贈る」という意味だが、（注1）に説明があるように、ここでは「和平の条件として宋が契丹に銀と絹を贈る」という意味。また、この後皇帝に謁見した曹利用が「契丹に贈る銀と絹の総額が三十万になった」と答えている点を踏まえれば、皇帝は宦官に命じて、契丹に贈ることになった銀と絹の総額（＝所レ賂）がいくらになったかを尋ねさせたのだとわかる。したがって「問所賂」は、「問レ所レ賂」と返り点を施して「賂ふ所を問ふ」と読む。全体では、「内侍をして賂ふ所を問はしむ」と読み、「皇帝は宦官に、契丹に贈る銀と絹の総額を尋ねさせた」という意味にな

る。正解は③。

問5　解釈の問題

まず傍線部を直訳してみよう。「姑」は「しばらく」と読んで「とりあえず・しばらく」の意味。「了」は「終える・済ます」の意味。「亦」は「も同様に・やはり」の意味。「可」は「かなり」と読んで「よろしい・かまわない」の意味。「耳」は「のみ」と読んで限定で「――だけだ」と訳すか、強意の意味で「――のだ」と訳す。以上を踏まえて直訳すると、傍線部は「とりあえず事を済ませたならば、それでもよろしいのだ」となる。

次に文脈をもとに「事を済ませる」の具体的内容をつかもう。宦官の「豈非三百万乎」（なんと三百万ではありませんか）という言葉によって、曹利用が和平交渉で取り決めた銀と絹の総額が三百万だと思い込んだ皇帝は、額のあまりの大きさに驚き、「太多」（多すぎる）とつぶやいた。その後に皇帝が述べたのが傍線部である。この流れから推測すれば、皇帝はいったんは額の大きさに愕然としたものの、やがて気を取り直し、和平を結ぶためならばそれでやむを得ないと考え、三百万でもかまわないという意向を示したのである。したがって「事を済ませる」というのは、「三百万の額を贈るという条件で契丹との和平を結んだ」ことを表す。以上を踏まえて言葉を補いつつ全体を解釈すると、「とりあえず契丹と和平を結ぶことができたならば、契丹に贈る銀と絹の総額が三百万でもかまわないのだ」となる。この意味に合致する③が正解となる。

①「契丹との間で和平を維持することができる」・②「何の意味もない」は、「亦可耳」の解釈が誤り。④「契丹に贈る銀と絹の額を低く抑えることができたら」・⑤「曹利用が無事に帰国することができただけでも」は、「了レ事」の意味を取り違えている。

問6　内容説明の問題

各選択肢の内容が本文の記述と一致するかどうか、慎重に検討しよう。

①は、「内心は三十万に抑えたいという皇帝の真意を察し」が誤り。**【設問解説】問2**にも述べたように、皇帝は「（和平を結ぶために）どうしてもやむを得ないのであれば、（宋が契丹に毎年贈る銀と絹の総額は）百万であってもよろしい」と述べており、「三十万に抑えたい」という意向は示されていない。「三十万以内に抑えたい」というのは寇準の考えである。

②は、「契丹との交渉で銀と絹の総額を三十万に抑えられたのは寇準が交渉の仕方を事細かく指示してくれたおかげであることを包み隠さず報告した」が誤り。寇準が曹利用に指示したのは、「総額を三十万以内に抑えよ」ということだけで、交渉の仕方までは指示していない。

③は、「皇帝から遣わされてきた宦官には三百万だと偽り」が誤り。**【本文解説】**にも述べたように、機密事項である総額を口にすることをはばかった曹利用は、三本の指を頬に当てる身ぶりによって、総額が三十万であることを伝えようとした。ところが、宦官はこれを三百万だと誤解したのである。「曹利用が三百万だと偽った」というのは誤りである。

④は、「契丹との交渉で銀と絹の総額を三十万に抑えられたのが寇準の助言のおかげであることを隠し」が誤り。寇準は曹利用に対して、「総額を三十万に抑えよ」という指示を与えただけであり、どうすれば三十万に抑えられるかという助言を述べてはいない。

⑤は本文の内容と一致しており、正解である。